

2011 年度、M J E T 植林ツアーの記録

8月20日～8月28日



目次

要約	1
はじめに	1
1. 植林ツアー実施の概要	2
2. 植林日誌	6
3. 農村生活体験コース	11
4. 環境・開発コース	14
5. 交流会	17
6. 観光	18
7. 健康管理	19
8. Than Sin Kyae 村への太陽光発電装置の提供	21
9. 植林ツアー体験記	22
10. 植林ツアーの課題	47
11. 植林ツアー後記	48
付録：	
1 植林ツアー参加者	50
2 植林ツアー日程表	51
3 二つの村の概要	52
4 写真集	54
5 植林地図	58

要約

目的	ミャンマー中部乾燥地域に位置するバガン郊外の村において、ミャンマー青少年と交流しながら、協働して植林を行うことによって、地域の緑化に貢献するエコ・ツーリズムを実施する。
期間	2011 年 8 月 20 日から 8 月 28 日まで
参加者	学生 9 名、社会人 13 名、計 22 名
植林の場所	Thant Sin Kyae 村の共有地と East Phar Saw 村の共有地
成果の概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. Thant Sin Kyae 村と East Phar Saw 村の共有地において、村人と一緒に、計 1200 本の樹木を植林することができた。 2. 二つの村の人達と一緒に植林し、交流会を行ったことによって、お互いの理解と親睦を深めることができた。 3. 「農村生活体験コース」と「環境・開発コース」という選択コースに参加して、農家の生活を体験したり、森林保護と取り組む村人の生活状況を学習することができた。 4. バガンの雄大な遺跡およびボパ山近郊の寺院、風物、地場産業とビルマ料理を十分楽しむことができた。 5. ヤンゴンのミャンマー日本仏教徒青年協会の会員と交流会を開催して、相互の理解と親睦を深めることができた。

はじめに

植林ツアー参加者 22 名（男性 14 名、女性 8 名）は、村人と共に、約 3 日間で 1,200 本の植林を行うことを計画していた。パートナーの The Nature Lovers Group の U Aung Din とスタッフ（U Wunna Min）は、事前にバガンに赴き、村人にオリエンテーションを行い、同時に、一緒に穴掘り等の準備を行った。また、僧院からも U Lin Naing, Ko Htet Min Thu, と Ko kaung Htet Paing の 3 人が同行し、参加者と村人との間のコミュニケーションを円滑に図ることになった。MJET は出発前に 1 回の勉強会と 2 回の打ち合わせ（東京と京都）を開催した。また、特に交流会の準備として、バガンのホテルで、毎夜、夕食後、全員が歌と水祭りの踊りの練習を行った。

今回、二つの村の人々と一緒に交流し、植林を行うことができたが、二つの村はかなり異なった特徴を持っている。Thant Sin Kyae 村は、小学校が集会所を兼ねており、先生が緑化委員会に協力して植林に参加した。East Phar Saw 村は、村の集会所が拠点となり、緑化委員会が中心となって、村人を動員する形で多くの村人が参加した。小学校の先生は側面的に参加している。また交流会には、両村の村人全員が参加し、会場は熱気に包まれた。

1. 植林ツアー実施の概要

(神田道男)

(1) 日程概要

今回の参加者 22 人は、東京グループが 15 人、京都グループが 6 人、バンコックからの参加者 1 人と 3 グループに別れて参加し、以下の日程で植林ツアーを行った。

- 8 月 20 日 (土) : 移動 (東京 (大阪) - バンコク - ヤンゴン : タイ航空利用) または
(東京 (大阪) - ハノイ : ベトナム航空) 他 (エイシェン プラザ ホテル)
- 21 日 (日) : 移動 (ヤンゴン - ニャンウ : エアーバガン) (タジン ガーデン ホテル)
: 植林 (タン・シン・チェ村 : 300 本)
: Sun-set、水祭りの踊り練習
- 22 日 (月) : バガン周辺の林業の現状 (講義)
: 植林 (イースト・パッソウ村 : 400 本)
: 水祭りの踊り練習
- 23 日 (火) : 植林 (イースト・パッソウ村 : 500 本)
: タンシンチェ村の若者とサッカー試合 (15 分 X 2) : 水祭りの踊り練習
- 24 日 (水) : ラベル付け (イーストパッソウ村)
: ポパ山へのバスツアー (椰子・油絞り、寺院参拝、昼食)
: 交流会 (タンシンチェ村小学校校庭、歌、ジェンカ、紙風船、水祭り)
- 25 日 (木) : 視察プログラム (農村生活班 12 名、環境保護班 8 名)
: 交流会 (イーストパッソウ村集会場前、歌、ジェンカ、紙風船、水祭り)
- 26 日 (金) : PCM ワークショップ (視察プログラムに基づく問題分析)
: 移動 (ニャンウ - ヤンゴン ; エアーバガン)
: シェダゴンパゴダ参拝
- 27 日 (土) : 僧院における日本語クラスとの交流プログラム
(歌、紙風船、茶 (盆点前)、ジェンカ) 奨学金授与
: ボジョウ市場視察
: 移動 (ヤンゴン - バンコク - 東京 (大阪)、ハノイ - 東京 (大阪)) 他
- 28 日 (日) : 東京 (大阪) 着

二つの村に到着して最初に驚いたことは、2007~2010 年に植林した苗木が、2 m~6 m も高く、それぞれ立派に育っていることだった。2010 年に植林した木々の中でもユーカリはすでに 2 m を越えるものが数多く、すでに小さな林を形成していた。更に私たちの目を奪ったものは、あまりにも立派で大きな葉をつけたチークの林であった。

毎日のプログラムが朝から晩まで盛りだくさんで、1 週間の滞在が 1 ヶ月も滞在していたようだったと感じた人も多かった。2 度目の参加者は、2 年前に植林した木々の生長振りに感動を覚えた」と記している。

(2) 植林の概要

今年は 2 人の森 (75 本) 1 件、家族の森 (30 本) 2 件、家族の森 (355 本) 1 件、企業の森 (100 本) 1 件、MJET の森 (400 本) が、それぞれ単位として植林された。更に個人の森 (5 本～25 本) 32 件は、East Phar Saw 村のパートナーとなる農家の庭に植林された。

植林した樹種とサイトは以下の通りである。

Trees Planted in 2011 in Than Sin Kyae and East Phar Saw Villages

Species Sites	Kokko (KK)	Mezali (MZL)	Tamar TM	Magi (MG)	Eucaly -ptus	Total
Than Sin Kyae Village						
E school A	—	—	120	—	70	190
E School B			—		110	110
Sub total	—	—	120	—	180	300
East Phar Saw Village						
A F Forest	12	8	85	9	9	123
B F Forest	—	31	15	2	65	113
C F Forest	—	5	5	—	72	82
D F Forest	—	—	4	—	14	18
E F Forest	—	—	—	—	19	19
F MJET Forest	140	139	28	25	68	400
House yard	—	26	104	—	15	145
Sub total	152	209	241	36	262	900
Grand total	152	209	361	36	442	1200

2011.10. 13

タンシンチェ村

- タンシンチェ村では、第 2 8 小学校の北西側、2009 年の植樹場所の延長と小学校の正門を入った右手の 2 箇所に植樹。植樹穴は約 1.5m 間隔におおよそ 40 c m 画のものを村の方で準備。また牛糞を肥料として準備。
- 苗木は Nature Lovers が準備 (タマール、ココ、マザリ、MG、ユーカリ他)。
- 以下のドナーの 300 本を村人と協同で植樹。

*企業の森 : The Japan AMC Forest 100 本、*二人の森 : The Ryota and Tomoki

Forest, 75 本、*家族の森 : Brewka Forest 30 本、Csizmazia Forest 30 本、

*個人 : Tomoko Furusawa 25 本、 Yin Yin Win 10 本、 Naguranoki 10 本、

Kyaw Soe 10 本、 Yumiko Okamoto 10 本

イーストパッソウ村

- イーストパッソウ村では、小学校入口の東側部分を中心に企業の森を植樹、個人分は、村内の農家の庭に植樹。
- 植樹の準備、苗木の調達、樹種は基本的にタンシンチェ村と同様。
- 以下の 900 本を村人と協同で植樹。

＊企業の森：MJET Forest 400 本、＊家族の森：The Fujimura Forest 355 本

＊個人 135 本：M.Takahashi 10 本 Eco-Abeam 10 本 R. Takahashi 5 本 K. Yashiro 5 本

Y. Fukunaga 5 本 S. Naganawa 5 本 J. Harigaya 5 本 Y. Saeki 5 本

R. Yamamoto 5 本 S. Noguchi 5 本 Y. Ito 5 本 K. Koishi 5 本 M. Ueshita 5 本

Y. Uwotani 5 本 Y. Shimura 5 本 M. Kanda 5 本 M. Kojyo 5 本 S. Furuhashi 5 本

A. Okada 5 本 A. Kimura 5 本 H. Murakami 5 本 S. Kwase 5 本 E. Kagami 5 本

K. Suzuki 5 本 N. Shimono 5 本 M. Fujisaki 5 本 Y. Matsuo 5 本

過去の植林の生育状況

- 2009 年から 10 年にかけて植林された木々の生育状況は、タンシンチェ村の一部（旧小学校跡の道路寄りとパゴダ裏の道路より）を除き順調である。特にイーストパッソウの小学校のチークとパゴダの広場のユーカリは 2m を越えるものが多く驚かされた。溜池の水位は昨年より下がっているから村人による水やりか、地味が良いためだろうか。このまま順調に生育することを期待したい。タンシンチェ村の小学校では、2007 年、2008 年の試行期のものもあり、各年度を比較することができる。毎年着実に成長していることが分かる。

（3） 視察プログラム

視察プログラムは今年初めて実施したものであり、植林ツアーが充実したものとなった半面、バガン観光の目玉であるパゴダの見学などが限定され、ややバランスを欠いた面もあったと思われる。内容、村人との関係、ワークショップのやり方など、参加者の意見を聞いて改善していく必要がある。

農村生活体験コース

農村生活班は、2 つの村に分かれ、最終的には、2 人ずつホームヴィジットをして、昼食を作ったり、食べたりした。視察内容やホームヴィジット先は、Nature Lovers が、あらかじめ関係者と協議して決めてあったが、僧院、溜池、畑の状況、村内の家内工業など集団で見て、ホームヴィジット先を訪問するという形式であった。ホームヴィジット先では言葉の問題があり、過ごし方が難しいと感じた。（私の場合は、牛を使った落花生の油絞り作業を見せてもらい、その後食事という形であった。）農作業は、午前中の早い時間に終わってしまうので、これに参加することは難しいし、水汲みは足手まといになりそうである。

環境・開発コース

環境・開発班はバガンから 1 時間程度の、自然林を保護しながら生活している村を視察し、森を保護している背景、仕組みについての聞き取りを中心に行った。エコツアーとしてどう発展させて行かかが今後の課題であろう。

26 日午前中に行ったワークショップは、限られた時間で行う必要があり、自由に意見を出し合うということはなかなか難しいと感じた。今回のツアーは雨に降られなかったが、ワークショップの日は、豪雨でプログラムとしては幸いであった。パゴダの見学では雨にたたられて大変であったと思われる。

（４）交流活動

タンシンチェ村、イーストパッソウ村、ヤンゴンの僧院の 3 か所で交流会を開催した。いずれも、MJET と村の子供/日本語クラスの生徒が交互に出し物を行い、村人も多数参加し幸い、雨も降らず盛会であった。昨年はミャンマー語の歌やミャンマー語による劇（浦島太郎）を行ったが、今年は、参加型の紙風船やジェンカ踊りを行って、皆で楽しめるように工夫した。水祭りの踊りの練習はきつかったが、見せ方を工夫して成果を示すことが出来たと思われる。村の出し物にも水祭りの踊りがあったが踊り方にも色々ある事が分かった。

2. 植林日誌

Melon グループ（魚谷弥生、伊藤優、高橋力也、木村明弘、鈴木慶一、野口彩）

文責：魚谷弥生

ミャンマー滞在の1週間のうち計4日に渡り、バガン地方の Than Sin Kyae 村と East Phar Saw 村で植林活動を行った。全体の流れとしては、8月21日午後に前年度までの植林地の視察と、植林に関するブリーフィング、試験的な植林を Than Sin Kyae 村で行い、22・23日は East Phar Saw 村で視察と本格的な植林を行った。また、24日は前日までに完成しなかった苗木名などの書かれたネームラベル付け作業を午前中行って終了した。

雨季とはいえ、炎天下の中の不慣れな作業で日本人は非常に体力を消耗したが、村人たちと Nature Lovers の方々のとても積極的な協力体制があったため、無事予定数の植林が達成できたのだと感じた。以下、植林に関する詳細日程と気づきを示す。

8月21日午後 Than Sin Kyae 村

まず始めに、1年前や2年前に植えた木がとても大きく育っている様子を観察し、植林の目的や効果、苗木の植え方に関する図を用いたブリーフィングを受けたため、モチベーションを高めることができた。そしてトライアルを実施する前に、ネームラベル作りを行った。トライアル実施にあたり、既に掘ってある穴と苗木に、番号付きのタグを割り振っていく作業が思った以上に難しく(今回の植林全体での課題か)、また穴の深さが浅いなどで手間取り、一緒に作業を進めた村人と交流する余裕が持てないまま目標数を達成することに追われた。

8月22日 East Phar Saw 村

今回の植林を本格的に実施する East Phar Saw 村を初めて訪れ、植林予定地(村の共有地)や村の中を視察した。ここでも穴は村人によって既に掘られており、日本人一人に対し村人一人をパートナーとして紹介され、作業がスタートした。パートナー以外の村人達が、手慣れた様子で牛糞の肥料分配係とゴミ回収係、水やり係を分担してくれていたため、とてもスムーズに作業が進んだ。子どもたちが主にゴミの回収係を引き受けてくれていたが、回収したプラスチックゴミ等は農地の片隅に集められ、その後どのように処理されるのか気になった。

8月23日 East Phar Saw 村

前日までの未達成分を村の共有地に植える作業と、メンバーそれぞれが自分の木をパートナーの農家に植えに行く作業を行った。この頃になると、村に顔見知りも出来てきて、仕事を交代で行ったり、数少ないミャンマー語の知識で言葉を発して交流したりする余裕もでてきたように思う。また、共有地ではなく農家の庭先に自分の木を植えさせていただき、East Phar Saw 村との個人的なつながりができたような感覚が強まった。

8月24日 East Phar Saw 村

前日に終了できなかったラベリングの残り作業を行った。植林台帳に書かれている苗木の種類と実際植えられているものが違って、当初の予定より時間がかかった模様。苗木を分配する段階での十分な注意が必要である。



Mango グループ植林日誌

Mango グループ(小石和平、岡本由美子、古城真理子、川瀬翔平、神田道男)

文責：古城真理子

植林はバガン、ニャンウーの Than Sin Kyae 村と East Phar Saw 村で行った。私たち Mango グループは他のグループに比べて人数が少なかったこともあり、心配はあったが、どちらの村でも村人たちの協力のおかげでスムーズに仕事を終わらせることができたと感じている。また、現地の Nature Lovers のみなさんは通訳だけでなく、仕事の振り分け等もして下さったため非常に助かった。

8月21日

朝の便でヤンゴンからバガンに向かい、到着後まもなく Than Sin Kyae 村を訪れた。まずは、以前この村に植えた木々の成長を確認しに向かった。たった1年でとても大きく成長している木々も多くあり、これからの植林へのやる気につながった。自分自身はあまり参加しなかったのだが、穴を掘る作業は土壌の関係などもあり、男性陣はとても苦勞しているようであった。また、村の小学校ではおいしい昼ごはんもいただいた。その後、ラベル作りをし、小学校の周辺で最初の植林活動をした。この日は私達のグループに村人が2人しかついておらず、また、勝手もわからなかったため、結局日本人だけで植林を進めてしまった感があったのは残念であった。

8月22日

East Phar Saw 村を訪れた。この村は滞在先のホテルからもほどよい近さで、今回の植林のメインの村であった。始めに村長さん等に連れられ、植林予定地や村の中を見て回った。その後、植林をしたが、ここでは穴が掘られていたため、すぐに植林に取り掛かることができた。また、村人の数も多く、一人一人が自分のパートナーを持ち、植林をすることができた。途中、肥料が足りなくなる等アクシデントはあったものの、村人同士の連携が取れていたため、仕事を非常に早く終わることができた。そのため、植林が終わった後、皆で写真撮影をしたり、おしゃべりをしたりする時間がたくさんあり、楽しい時を過ごせた。

8月23日

前日に引き続き、East Phar Saw 村を訪れ、昨日植え終わらなかった分の植林をした。また、この日はそれぞれ自分自身の名前を書いたラベルを持って村人の家を訪れ、そこで木を植えた。村人がとても優しく接してくれ、温かい気持ちになったし、自分の木を植えたことによって達成感も感じた。

8月24日

East Phar Saw 村に行き、前日植えた苗木へのラベリング作業の残った分を行った。計画と実際に植えてある苗木に違いがあったので、手間取り、時間がかかり、炎天下の中、とても苦しい思いをしたが、そのおかげで苗木と名札の名前を一致させることができたようになったのは収穫であった。



Pineapple グループ植林日誌（班長：山本、植林班長：村上）

メンバー：植下雅也、山本林彌、村上俊一、加賀美英子、藤村達夫、古澤智子

文責：山本林彌

パイナップルグループは上記の 6 名で構成され、植林班長の村上さんを中心に植林を行なった。藤村先生は全体の指揮のため別行動であり、また、古澤さんは 22 日までの参加であった。

・ Thant Sin Kyae 村

この村では、21 日に Csizmazia Forest の 30 本と Ms. Tomoko Furusawa の 25 本を植えた。今年はまだ雨が少なく土が硬かったため、穴を掘るのに時間がかかってしまっていたようであり、事前に掘ってある予定であった数の穴はできていなかった。この穴掘りは重労働である。そのため、男性陣が穴を掘り、女性陣が苗木を植えるという図式が自然とできあがっていた。私たちのグループの現地のパートナーである女性 2 人は慣れているようで、苗木を植えるのが非常に早く、私たちなどいないかのように植えていった。そのため、私たちのグループは開始が他のグループに比べて遅かったのにも関わらず、他のグループに遅れることなく終わらせることができた。途中、村上さんが穴を掘っている際、水道管を掘りあてるといふアクシデントが発生した。そのため、村上さんはこの日、1 本も植えることなく終わってしまった。

・ East Phar Saw 村

この村では 22 日と 23 日の 2 日間植林を行なった。この村では日本人 1 人に対し、現地のパー

トナーが1人ずつついた。それぞれのペアで「チャノ(マ)イエナーメー～」と自己紹介をし、割り振られた分の植林に取りかかった。こちらの村では予定数の穴は掘られており、ラベルも事前に作成してあったため、すぐに植林を開始することができた。Thant Sin Kyae 村の時と同様、現地のパートナーは慣れた手つきで次々と進めていったため、置いて行かれないようにしていくのが大変であった。人数が多かったため、予定数はすぐに植え終わってしまい、一通り終わった後は、村人総出で水を汲みに行ってくれ、その水を日本人が苗木の植わっている穴に撒いていたのだが、数人の子供達がバケツを持つのを手伝ってくれ、私たちの負担が減少した。また、この村では、藤村先生と古澤さん以外の4名は自分の名前のついた苗を家の庭先や垣根の横等に植えた。

・所感

植林予定数の穴が掘られていなかったり、それぞれの穴に対し、植える予定の苗木と実際に植えられていた苗木の種類が違っていたりということがあったが、それでも予定数の植林が完了したのは、それぞれの村の人々が村総出で協力してくれたためであると感じられた。しかし、村の人々もヒマではないはずである。また、私たちが何もしないでただ待っているだけという時間もあった。穴が足りなかったらラベル作りの時間に、何人かは穴掘りに専念して仕事を分担したり、植えた後のトラブルを解消するためにプロットを厳密に作ったりすれば、よりスムーズに植林を終えることができ、村の人々の負担も減ったのではないと思われる。

また、パートナーと一緒に植林を行なったものの、パートナーとはほとんど会話ができなかった。中には英語ができる人もいて、その人達とは会話ができたものの、そうでない人との会話は自己紹介で終わってしまった。古城さん作の携帯用会話帳は非常に役に立ったが、自分でも事前にもう少しビルマ語を覚える努力をしておけば(簡単なことではないが)良かったと感じられた。



Papaya group 植林日誌 (班長：松尾雄一)

メンバー：松尾雄一 古橋櫻子 岡田篤 下野直子 福永喜朋

文責：松尾雄一

8月21日：植林作業の初日はThant Sin Kyaeを訪れる。午前は、午後からの植林作業に備えて、現地の若者たちと一緒に苗木を植えるための穴を掘る。「凸」という字を逆さまにしたような形状の二段階の穴を掘る作業は、傍から見る以上に難しく、いびつな仕上がりになってしまった。普段からこの作業に慣れていると思われる現地の若者たちにはかなわなかった。器具の数について言うと、現地

の若者たちと共同で作業を行うには少ないと感じた。また、スコップのようなものがあれば、削った土を穴から効率的に取り出せたと思う。

午後からの作業では 70 本を植林。苗木が真っ直ぐになるようにコンポストを植えるのは簡単ではなく、傾いた状態になったものもいくつかあった。添え木を使うために現地の若者に言葉で説明したかったが、十分なビルマ語の語彙を持ち合わせていなかったため、身振り手振りで説明して添え木を立てた。言葉による意思疎通ができなくても、お互いがやりたかったことを成し遂げられた時にはやはり達成感があった。

8 月 22 日：2 日目は East Phar Saw での植林。出発前にホテルで木に付けるラベルを作成。Papaya Group はドナー名 'The MJET Forest' のラベルを作った。ビニールの小袋への封入を手作業で行うのは当然としても、個人的には印字については手書きよりもプリンター等を使用した方が効率的ではと感じた。土壌について、私が植えた場所は Thant Sin Kyaе よりも固く、植えるのに苦労した。現地のパートナーと組んで植えるにあたり、本ツアーに何度も参加されている福永さんに教えていただいた要領でコンポストを植えていった。こうやって土を埋めていくんだよと実演したつもりだが、完全に伝わったとは思えず、口頭で説明できるだけの語彙があればと感じた。

8 月 23 日：3 日目は昨日に続いて East Phar Saw へ。いよいよ植林作業の最後の仕上げ。メンバーはそれぞれスポットに分かれて植林作業を行う。私は個人宅の脇の路地に沿って植えていった。振り返ると、思っていた以上に植林作業を早く終わることができたように感じる。これもパートナーである現地の若者たちが積極的に作業を進めてくれたおかげだと思う。これまでのツアー開催により先方にもノウハウが蓄積しているのだと思う。

また、これまでに何度も参加された福永さんをはじめ、植林班長の岡田さん、古橋さん、下野さんがグループ内でうまく連携しながら、現地のパートナーと作業を進められたことも大きいと思う。ミャンマーの地に苗木を植える作業を通じて、私たちの心の中にもかけがえのないものが植え込まれ、刻まれたといえるツアーだった。



3. 農村生活体験コース

村上・川瀬・下野

目的

現地農村の暮らしを直に体験することで、村に潜在する課題や利点について理解を深め、今後の発展について考察を行う。

活動概要（川瀬・下野）

農村体験コースは Exchange Program の一環として実施され、計 12 名が参加した。参加者は二人一組で、East Phar Saw 村 Than Sin Kyae 村の各家庭で半日間の農村生活を体験した。以下、各村における活動を記述する。

・East Phar Saw 村

午前中は、参加者 6 名で豆などを育てている畑を見学し、一部農作業を実施した。帰りの際には、村に一つの荘園で僧侶に話を伺った。

昼、畑から帰った後は、すぐ昼食の用意をすることとなる。村での主食は米であるが、通常、飯は畑に行く前の朝食時に行うとのことであり、お昼は何品かのおかずを作ることとなる。今回、参加者は各家のお母さんに教えていただきながら、一品ずつミャンマー料理を作らせていただいた。

午後は、陽射しが強くなってくることもあり、村の方々にとっては休息时间である。参加者は、お邪魔している家の方々と身振り手振り、時にはミャンマー語英語辞書(家にあったもの)を指さしながら和気あいあいと交流を行った。なお、この時間に、水汲みやその他の家事もこなしており、ある家庭は、現金収入をえるための家内工業製品（バスケット等）も製作していた。短時間の滞在のみであったが、通訳を交えて所々で村についての詳しい情報も入手することができたとともに、村の人々の生活が垣間見えた貴重な体験であった。

・Than Sin Kyae 村

午前中は参加者 6 名で村全体を見学しながら、情報収集を行った。村には、ミシンが 10 台程度ある洋裁所があり、そこで女性が服を作り近くの市場へ出荷していた。また、水に関しては村の一角のため池に雨水を溜め、農業に使用していた。生活用水は、イラワジ川から引いてきた水を汲める場所があり、そこから牛車で村の貯水タンクに水を搬送していた。この他、村には僧院、小学校、図書館等の施設があった。他方、医療的な機関はなく、伝統的な家庭療法を行い、それでも対応しきれない場合は村の外の病院に搬送しているとのこと。専門的な知識を持っている人はいないようであった。

午後は 2 名ずつ 3 家庭に分かれて家庭訪問を行った。昼食をご馳走になり、家族生活を見学した。家庭では収穫したゴマをふるいにかけて大きいものをより分けたり、牛を使ってピーナッツ油を採取する作業を体験した。家庭の庭には貯水用のカメがあり村の貯水池から汲んできた水や雨水を保管していた。汲んできた水の上澄みは沸かして飲み水に使用しているとのことであった。食事後は持参した折り紙で鶴を折るなどして交流した。皆、折り紙に大変興味深々でとても楽しい

時間を過ごすことができた。短い時間であったが、村の人々の生活を垣間見る貴重な体験となった。

ワークショップの結果

・Fact Finding

二つの村での体験から得られた主な結果は以下のとおり。

	East Phar Saw	Than Sin Kyae
人口	500 人	1000 人
世帯数	110 戸	200 戸
農作物	リョクトウ・ピーナツ・スイカ(主食のコメは外部へ依存)	リョクトウ・ピーナツ・メイズ・ゴマ(主食のコメは外部へ依存)
家内工業	織物・竹細工	洋裁
水源	ため池、雨水	ため池、雨水、水汲み場(イラワジ川から取水)
水利費	ため池からの使用のため、水利費はかからない。	200 チャット/200 ガロン
電気使用世帯数		100 戸
T V 持ちの世帯数	25 戸	80 戸
電気料金	19 時～21 時 2000 チャット/月 21 時～22 時 2500 チャット/時 (21 時以降は、2500 チャットを電気を使用している戸数で分割する。)	2500 チャット/月 19 時～22 時 2500 チャット/月 (発電機は村長宅)
医療機関	UNICEF の寄付による保健所あり	なし
教育機関へのアクセス	小学校のみ村内に存在	小学校のみ村に存在
金融システム	存在しない(家畜や農作物を貯蓄として利用)	存在しない(家畜や農作物を貯蓄として利用)
医療システム	看護師駐在	医療機関なし(伝統的療法に依存)
仕事	就職先が限定される。 (農業以外では教師や看護師くらいしか就職先はない。)	就職先が限定される。 (農業以外では教師くらいしか就職先はない。)
その他	子供の数が少なくかつ、就職先が少ないため高齢化が進行	子供の数が少なくかつ、就職先が少ないため高齢化が進行

・問題分析

- ・問題分析を行うに当たっては、彼らの現状が「問題な状態」と言えるのかといった疑念の声

も生じた。彼らの社会は、既存の環境に対してはよく適応し、少なくとも現状において、物質的な部分を除けば、彼らは豊かな生活を営んでいると思えたからである。

- 作業としては、Fact finding をもとに種々問題点を出し合い、物理環境的（天水に依存等）、社会経済的（主食の外部への依存等）なリスクには脆弱である可能性が高く、「村の不安定さ」を中心問題を抽出し、問題分析を行った。
- East Phar Saw 村及び Than Sin Kyae 村が持つ「村の不安定さ」という中心問題は、水不足、衛生環境、農業の生産性、低所得、金融仲介機能の未整備という側面に分解できた。
- 水の問題については、今後、雨季も乾季も安定的に、簡単に十分な水を使用できるかが重要となる。また、衛生環境についても、安全な水を使用する環境は不可欠である。現状では、水が必要な場合は、かなりの時間と労力をかけて遠くの水源に足を運ぶ必要があるし、極端な水不足となった場合にはそれすらも困難となる可能性が高い。また、村の人々は、殺菌等しない雨水を飲み水とし、イラワジ川の水を飲み水としている家庭も多く見受けられた。農業に至っては完全に雨に依存しているため、ひどい乾季の場合の場合には極端な問題が生じる可能性もある。何らかのかたちで、遠くの水源地からもある程度安価に水を調達できる体制を整えるとともに、一定の浄水設備の導入も望まれる。
- 農業生産性や現金所得の低さ、現金貯蓄等の金融システムの未整備の状況では、生活を良くするための機器の導入や、村の人々の共有財産となるインフラの整備も簡単にはいかないと考えられる。生産性を高めるためには、機械化や効率的な肥料、安定的な水等が必要である。また、村の内部又は村同士が有機的に係り合い、収入を生む新たなビジネスの創出等の新たな動きも必要と思われるが、そのためには、電話等の情報機器又は安価な人、モノの移動手段を確保することも効果的と考えられる。



考察

農村生活体験コースでは、ごく僅かな時間であったが実際に村人たちの生活を体験することにより、普段の生活や旅行では理解することが出来ない農村の現状について考察を行うことが出来た。それぞれの村では、Fact Finding や問題分析で明示されたように、物質的には我々の生活と比較して圧倒的に貧しい暮らしが営まれていた。

他方、その暮らしは、現地の環境に適応しており、村人達からも、自身の暮らしを恥じるような

そぶりは見られなかった。、彼らには彼らのなりの生活があり必ずしも我々の価値観が当てはまるわけではないことを認識することになった。

今後の課題としては、彼らの生活のしかたを、今回指摘したような基本的な問題に対処しながら維持していくためには、どのような観点から取り組む必要があるのかという点である。それぞれの村の経済と外部（都市部や米の供給地）の経済が実際にどのようにつながっているか（例：村がどの程度の生産物を生み出し、どの程度の生産物を消費しているか）をより詳しく観察することが、持続的な開発を目指す上で不可欠と考えられる。

4. 環境・開発コース

（メンバー：山本林彌、岡田篤、植下雅也、岡本由美子、鈴木慶一、藤村建夫）

文責：山本

(1) The Zoo Oo village 概況

私たち環境・開発コースのメンバーが訪れたのは、滞在していた Thazin Garden Hotel から車で1時間ほどの場所に位置する The Zee Oo village である。村の人口は997人、世帯数は206世帯であり、村の行政システムは、村長の下に、火災防止、水供給、教育、宗教、森林保護の5つの委員会が存在する。

(2) 調査内容

今回の調査では、1)経済(家計)、2)森林・エネルギー、3)水、4)教育の4つの観点から、村長及び森林庁の職員に対してインタビューを行なった。以下に知見を述べる。

1)経済(家計)

村人の大半は農業によって収入を得ており、主要な作物はヤシで、他にピーナッツ等も生産している。村には114人の農業従事者(51人：土地所有者、62人：非土地所有者)がおり、1世帯あたりの年間収入は約1,000,000kyat(≒USD1,750)である。村では主食となる作物が生産されていないため食料自給率が低く、米や肉は村外から購入している。

また、村にはマイクロファイナンスの制度が存在し、4,000,000kyatの資金が積み立てられている。各世帯は、最大30,000kyatまで、月利3.5%で借りることができる。返済できなかった場合の罰則は定められていないが、責任がないとみなされ、他の村人との関係が悪化する等、社会的制裁が与えられることとなる。

2)森林・エネルギー

村には40エーカーと41エーカーの広さを持つ2つの森が存在する。1つ目は、信仰上の理由から保護されており、森の中の植物等を持ち出すことが禁じられている。法によっても規制されているが、信仰による規制の方が強い。2つ目は、燃料採取のための森で、村で使用される薪はこの森で採取される。

村ではジェネレーターによる発電が行なわれており、人口の 40%は夜 6 時から 9 時まで、50kyat 支払って電気を使用している。他の村人はバッテリーライトを使用している。電力に対する政府からの援助は存在しない。

3)水

村で使用される水は Ayeyarwaddy 川、井戸、ため池、降水を水源としている。このうち、川と井戸から得られた水は有料で、村人は 1 ユニット(=150 ガロン、675l)あたり 200kyat 支払っているが、水供給施設を維持・管理する費用は賄えておらず、政府によって援助されている。川からの水は通年利用されているが、井戸の利用は年間 222 日に制限されている。これは、乾燥地域であるため水を節約せねばならず、雨季には雨水を利用にすることにより生活用水を賄っているためである。また、ため池は水が貯まった時に解放し、農業用水として利用されているが、年々縮小している。

4)教育

ミャンマーの教育制度は、幼稚園および 9 年制の学校から構成されている。5 年生までは政府による援助があり、6 年生以上は援助がなくなる。今年度から教科書やノート等が無償で支給されるようになった。

この村には初等教育機関までしか存在せず、高等教育を受けるためには村を出なければならない。この村の学校には生徒が 202 人、教師が 8 人在籍している。村出身の大卒者はこれまでに 7 人しかおらず、彼らは、村長、村役人、ホテルの従業員、教師になっている。



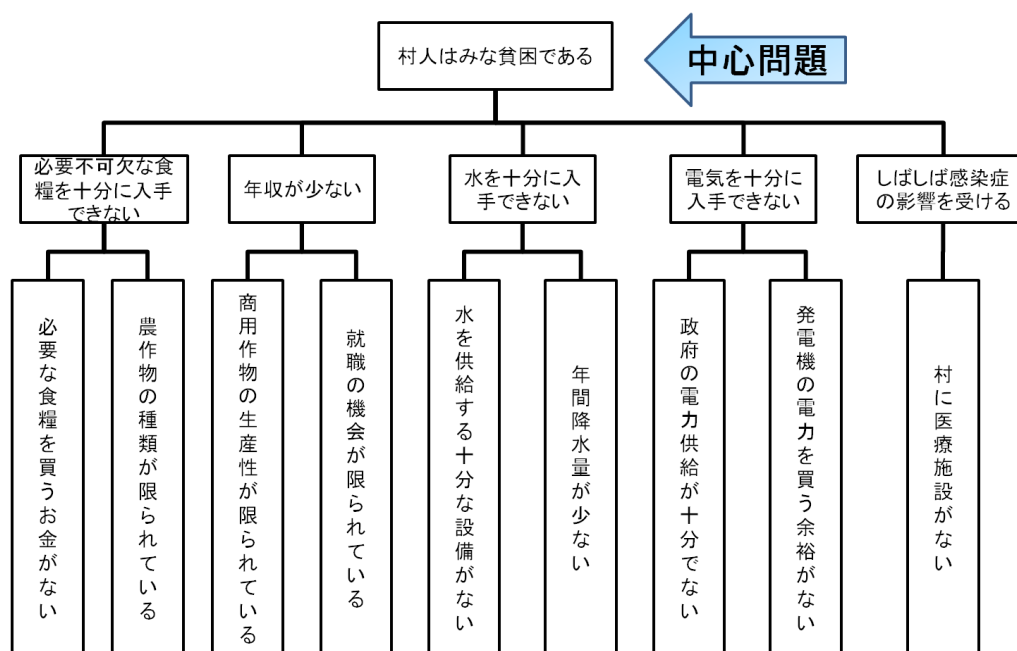
問題分析

文責：岡田

ここでは、問題分析について述べる。まず問題分析のツリーを提示し、次にそのツリー作成の経緯を説明することとする。最後に、このツリーから読み取れることについて触れる。

(3) . 問題分析のツリーの概略

前ページにおける村の現状の気づきを受け、以下のツリーを作成した。中心問題を最上部に設定し、以下、問題を徐々にブレイクダウンしている。このツリーの特徴は、下位の問題（現状）が上位の問題（現状）の直接の原因となっていることである。



図：Zee OO 村の問題分析ツリー

(4) . 問題分析ツリーの作成経緯

上記のツリーの各項目を設定した理由について、それぞれ説明を行うこととする。まず、中心問題を設定するために、前頁の気づきから、村が抱えている問題を議論し、それらの問題をすべて含む「村人はみな貧困である」という問題（現状）を中心問題に設定した。ここでは「貧困」という幅広い概念が、経済的な側面だけでなく、社会的な側面等多数の問題を含んでいることに注目していただきたい。

次に、その中心問題の原因である問題（現状）を気づきに基づき、食糧、収入、水・電力供給、健康の問題が中心問題の直接の原因であると設定した。更に、それぞれの問題をより具体的に考察した。その際に、それぞれの問題に対する原因を漏れなくダブリなく検討するため、問題の原因を一度抽象的に考察した後、気づきに基づく具体的な原因を当てはめるという過程で行った。具体的には、「必要不可欠な食料を十分に入手できない」という問題は、「買うことができない」とことと「生産することができない」とことが抽象的な原因となる。そして気づきから、双方とも具体的な現状を記載した。同様に、「年収が少ない」という問題は、「換金作物からの収入が少ない」とことと「農業以外の就職の機会が少ない」とことが抽象的な原因となり、水供給については「水を供給する施設がない」とことと「雨が降らない」とことが抽象的な原因となり、電力供給については「電力が十分に供給されない」とことと「電力を買う余裕がない」とことが抽象的な原因となり、感染症については、「治療する機会がない」とことが抽象的な原因となり、それぞれ具体的な現状をツリーに記載した。

(5) まとめ

このツリー作成を通じて、この村では環境問題（主に水不足）が「村人はみな貧困である」ことの原因となっていることが分かった。

5. 交流会

加賀美 英子

今回は2つの村（Than Sin Kyae 村、East Phar Saw 村）とミャンマー日本仏教徒青年協会(MJBYA)にて交流会を行った。交流会の日程、出し物、順番については下記の通りである。

Than Sin Kyae 村（8月24日（水）PM5:30～）

1. 上を向いて歩こう〔坂本九〕／北国の春〔ミャンマー語・日本語〕（全員）
2. ジェンカ（同志社大学）
3. 紙風船（女性全員）
4. 水祭りの踊り（全員）

East Phar Saw 村（8月25日（木）PM5:00～）

1. 上を向いて歩こう〔坂本九〕／北国の春〔ミャンマー語・日本語〕（全員）
2. ジェンカ（同志社大学）
3. 紙風船（女性全員）
4. 水祭りの踊り（全員）

MJBYA（8月27日（土）AM10:00～）

1. ありがとう〔いきものがかり〕／北国の春〔ミャンマー語・日本語〕（全員）
2. 紙風船（女性全員）
3. 茶道（同志社大学 小石）
4. ジェンカ（全員）
5. 学生と日本語・英語での会話

二つの村では同じ出し物を行った。MJBYA では水祭りの踊りに代わりに茶道を披露した。また最後に学生と日本語で会話する時間を設けた。**歌**に関して、「上を向いてあるこう」はテンポの良い曲であり途中から村の方々も手拍子をしてくれた。また「北国の春」はミャンマーでよく知られている曲であるため、一緒に口ずさんでいる者もおり好評であった。「ありがとう」は練習する時間が少なかったため音程が乱れた箇所があったが、学生の方々は熱心に耳を傾けてくれた。

ジェンカは先に我々が手本を見せて、2回目からミャンマーの方々にも参加してもらった。音楽に合わせて一定のステップで踊るという単純な繰り返しなので、老若男女に受け入れられ多いに盛り上がったプログラムであった。

紙風船は2人1組になって風船を落とさずに何回パスできるかコンテストを行った。日本チームの女性全員で手本をみせた後、各交流会で8組（合計16人）ずつに参加してもらった。対象は子供たちで、紙風船を多いに楽しんでくれた様子であった。ただしすぐに定員に達してしまい参加できなかった子供達もいたこと、パスの数え方（1人が何回もトスした場合等）についても考

える必要があるように感じた。(紙風船は浅草で調達)

水祭りの踊りはホテルやレストランで練習できたため、メンバー全員が一体となって踊ることができた。ミャンマーの方々にとって水祭りの踊りはとてもポピュラーであり、日本チームもロンジーを着用して踊ったため大盛況であった。ただし踊りの順序を声で伝えていたため、音楽が大きすぎた際に指示が伝わらないというミスがあった。

茶道については同志社大学の小石さんが薄茶点前(神田さん:お運び、古橋さん:正客)により、ミャンマーの学生4人に日本の茶会を体験してもらった。人数に制限があったものの心静かな一時を持つことができた。(干菓子も京都で調達)

最後に、学生と日本語での会話を楽しんだ。まだ日本語を話せない学生もあり、英語を織り交ぜながらの会話であったが、あつという間の時間であった。藤村先生が用意して下さった飴も交流を助けるツールとなった。日本に好奇心旺盛な学生が多かったが言葉だけでは限界があったので、日本の写真(日本の風習、日常生活など)やお菓子などをもう少し用意しても良かったと思った。

6. 観光 「百聞は一見に如かず」

古橋 櫻子

MJET ツアーは植林が一番の目的だが、ヤンゴンとバガンの観光も合間にすることができた。二日目にバガンに数えきれないほどあるパゴダの一つを訪れた。裸足で階段を上っていくのがなんだか新鮮に感じられた。上ってみると、見渡す限り木々の緑と散在するパゴダが見えた。夕日が沈んでいく風景は大変美しかった。夕日を浴びたパゴダは輝きを増し、よりきらびやかに見えた。藤村会長の提案でしばらくの間、黙ってこの景色を眺めようということになった。瞑想をする人、カメラを向ける人、それぞれに異なった時間を過ごした。静かに腰かけて座っていると、また目の前の風景が違って見えてきた。方方でさえずる鳥の声、風の音、どこかで話している知らない人たちの笑い声。自然と心が落ち着き、何も考えないでいい、無でいられる時間だった。刻々と時間がたつにつれて、景色もだんだんと変わっていった。日が沈むと数か所の電灯が付き、パゴダを照らしていた。シャッターを切ってみると、空が青紫色のように写り、幻想的な世界を体験できたような気がした。

五日目はポパ山に登った。バスから眺めたときは、頂上に建つ建物がとても印象的で、一体どうやって建てたのか不思議に思った。何とも形容しがたいその姿は、周りとは一線を引いているような存在に見えた。頂上まで登りきってみると、そこには上から周囲を見渡することができる絶景が待っていた。風がとても強く吹いていたが、ここは本当にミャンマーなのだろうか?と疑ってしまうほど涼しく、気持ちがよかった。

最終日にはほんのわずかな時間だったが、ヤンゴンの市場を観光することができた。果物や洋服、靴、宝石など、たくさんの品物であふれる市場は人が多く、普段のミャンマー人の生活を少しだ

け垣間見ることができたように思えた。また、物乞いをする親子や一生懸命絵を一人で売る小さな子供も多くおり、自分にはどうすることもできない無力さと貧困の現状も実感した。

他にも観光といえるかわからないが、心に残る体験をいくつもした。バガンでミャンマーの伝統的化粧であるタナカーを体験したり、焼酎、ごま油作りなど珍しいものをたくさん味わうことができた。また、古城先輩とホテルの自転車を借りて近くのお店までサイクリングしたことも楽しかった。毎日バスで移動していたため、現地の人と同じ目線でミャンマーの景色を眺めながら自転車をこいだことは良い体験になった。食事中に眺めた星空も忘れられない。あんなにたくさんの星を見たのは生まれて初めてだった。

出来る限りたくさん写真を撮ったつもりだが、写真では到底伝えることのできない風景、光景がミャンマーにはたくさんあった。絶対にこの景色を忘れたくない、とまばたきをするのが惜しいくらいに自分の目でしっかり記憶したいと思った場所、瞬間は数えきれないほどあった。ミャンマーには日本に決してない景色、建物、体験がある。「百聞は一見に如かず」とはまさにこのことだ、と今回身をもって感じた。

7. 健康管理

下野直子

1、 目的

ツアー参加者の健康管理。ケガ、病気時の対応を行う。

2、 持参物

- ・内服薬 解熱、鎮痛剤（カロナール、ロキソニン、ハイペン）
 整腸剤（ミヤ BM 錠）
 正露丸
 吐き気止め（ナウゼリン、プリンペラン）
 乗り物酔いの薬（トラベルミン）
- ・外用薬 抗生剤（ゲンタシン軟膏）
 ステロイド+抗生剤（リンデロン VG 軟膏・その他 絆創膏、ポカリスエットの粉末）

3、 結果

発熱 1 名→メイアクト、ハイペンを 4 日程度内服。その他、マルチビタミン剤、ポカリスエットで栄養、水分補給。

腹痛 1 名→ナウゼリン、メイアクト 3 日分お渡し。

その他

→村で売っていたアイスクャンデーを食べた 10 人程度に予防薬を内服。

→植林中のケガで3名に消毒後、絆創膏支給。

4、 考察

- ・薬の他、体調不良時のポカリスエットやビタミン剤が有効的であった。
- ・植林中にトゲが刺さったり擦りむいたりという事態をあまり想定していなかったため消毒・絆創膏などが不足した。また傷を洗うきれいな水がない場合にウェットティッシュなどが必要。
- ・おかゆは現地のホテルでも調達可能。カップスープやお味噌汁などを持参しておくといい

健康管理 所感

岡本由美子

私の業務は、主に、①渡航前に医薬品を準備すること（正露丸、胃腸薬、鎮痛薬、虫さされ用のムヒと軟膏、消毒液、カットバン、サロンパス）と、②渡航中は同志社大学からの2011年度植林ツアー参加者（教員1名、大学院生2名、学部生3名）の健康に注意することであった。

渡航前の医薬品の準備は荷物検査で引っ掛からないように配慮しながら行った。また、渡航中は幸いにも健康面で大きな問題は生じなかったが、8月23日（火）（植林3日目）、East Phar Saw村で午前中の作業を終えた時点で、同志社大学大学院生1名が体調不良をうったえ、ホテルに戻った。その夜は微熱があったが、1日、ホテルで休養をとった後、幸いにも体調が回復した。

体調不良の原因ははっきりとはわからないが、過労による免疫力低下ではないかと考えられる。事実、十分な休養をとった後、回復した。さらに、水、ライムジュース等の水分補給、ならびに、おかゆ、梅干しといった日本食をとることによって体調の回復が早まったと考えられる。なお、ライムジュースはホテル側につくるように指示を出した。

なお、本院生の体調に関してはMJETの藤村会長の他、他の多くの参加者からも食べ物の提供や情報の提供等、様々な形でお気づかいをいただいた。

この他、虫さされや指に棘が刺さった学生も1名でたが、大事には至らなかった。

来年度以降も、引き続き、もしものために、簡易的な日本食や常備薬をしっかりと日本から用意していく必要があると考えられる。また、参加者は渡航前は十分な休養をとっておく必要があると思われます。

8. Than Sin Kyae 村への太陽光発電 LED 照明プロジェクトの現況 (福永喜朋)

小生は、3年前から本プロジェクトの構想を練っていたが、MJET 植林ツアーに2009年8月参加する機会を得て Than Sin Kye 村を訪問して、現地調査を行った事がキッカケである。公共電力供給施設の敷設されていないこの村に、ソーラーエナジーLED 照明を設置する事により、村の夜を明るくし夜の生活に活性を与え、生活の質の向上に貢献したいと考えた。これに要する資金は、世界及び日本の篤志家による博愛に基づいた寄付金によるものとし、LED 設備は、住民に無償提供するポリシーとした。現在頂いた寄付金をベースに、先ず小学校内の集会室、職員室に設置する事とし、諸設備は中国、日本から購入済みである。

問題点

- 1年前から、幾多の現地関係者を通じて、日本からの製品輸入の Import Permit & Duty Exemption Certificate の当局よりの取得を努力してきた。2ヶ月前、Mr. Aung Din, Chairman, Nature Lovers International に政府高官への接触を依頼し進めて来た。
- 当方から、Letter of Authorization, Letter of Donation, Price List(Invoice), Packing List を提出済みであったが、今回の訪問で少し明るい見通しが見え始めた。Mr. Aung Din を通じて、先方に Formal Letter 提出を督促していたところ、輸入許可がこのほど取得されたとの、通知を受けた。出来れば2011年中に完成させたいが、2012年に延びるかもしれない
- 地元の校長、村長には現状を説明し諒解をとっている。
- 寄付金が、世界不況、東日本大震災により滞っている事から、日本の「ODA 草の根無償資金援助」に応募する事とした。Mr. Aung Din に local government sector を選定して local government sector の名前で、日本大使館、ミャンマーへの申請を依頼した。

今後共、各位のご支援を宜しくお願い致したい。

9. 植林ツアー体験記

(1) 学生参加者

『MJET 植林ツアーを終えて』

伊藤 優

同志社大学政策学部 3 年

2011 年 8 月 20～28 日の 1 週間、MJET の植林ツアーに参加しました。その体験記を書きます。そもそもこのツアーには、大学のゼミナールの研究の一環です。国際協力を学ぶ学生として、一度途上国の空気を肌で感じてみたいという単純な思いから参加しました。

結論から言うと、ツアーに参加して大変良かったと思っています。理由は主に 2 点です。一つ目は、バガンの農村の実態を生で見て、地元の人と交流できたという点です。先にも申し上げた通り、よりリアルな途上国の現状は、日本で机に向かっているだけでわからないと思います。そういったものを、自分の目で見て、考えることができたのは本当にいい経験になりました。特に、インフラが十分でない農村の環境、村の産業の実態、村民の方の生活など、ある程度予想していたものもあれば、想像を超えるものもありました。また、交流会をはじめ、植林活動、サッカーなど、現地の多くの方と触れ合えたことは何よりの思い出です。肝心の植林でも、現地の方々と一緒に汗を流せました。ただ、サッカーで負けたのは未だに悔しいですが…。

2 点目は、観光です。ツアーに観光プランを盛り込んで頂けたことで、それを純粋に楽しめたと同時に、ミャンマーに対するイメージが大いに変わりました。特にパゴダの上から見たバガンの風景は忘れることができません。ツアー参加者の方々にも恵まれ、本当に充実していました。

自分は、まだ就職活動を控えた学生で、卒業後の進路も当然決まっていません。海外で働くのか、国内外でビジネスの世界に飛び込むのか、または、国際協力の世界に飛び込むのか、それすらも決まっていません。ただ、今回ミャンマーを訪問したことで、何か人や世の中のために働きたい、という想いが芽生えました。それは、ミャンマーの方々を見て、切に感じたことでもあり、彼らが教えてくれたことでもあります。貧しくても、村、家族が一带となっていること、見ず知らずの国から来た自分たちと、言葉もわかるわけもなく話しかけてくれたこと。村民の方々との交流一つ一つが心に残りました。卒業後、どんなことをしていても、ミャンマーで感じたことを忘れずに、自分の中で大切にしたいです。今回のツアーは、学問的なことのみならず、大変刺激的な 1 週間でした。

「植林ツアーに参加して」

小石和平
同志社大学政策学部 3 年

私にとって初めての海外渡航がこの植林ツアーへの参加であった。そのため、初めはミャンマーに行くことに躊躇することもあったが、いざ行ってみると不安は吹き飛び、想像を超える素晴らしい経験が出来た。植林活動を初めとして、文化交流や農村体験プログラムなど、全てのプログラムで、日頃体験できない貴重な経験を得られた。ここでは、これらのプログラムで私が体験した事を以下にまとめて最後に総括していく。

植林活動

雨期にも関わらず、雨が全く降らないなかでの植林はけっこう辛いときもあった。しかし、村人と共に汗まみれ、土まみれになりながらも木を植えるための穴を掘り、水をやり、ひたすら木を植え続けるという作業は、普段味わえない達成感があった。同時に、木を植え、育てることがこんなにも大変であるということを知った。植林による緑地の効果はすぐに学べるが、乾燥地帯で木を植える作業、その後の水やりなどのケアの大変さは、実際に体験して初めて分かった。

村人との共同作業は言葉が伝わらなかったが、通訳の方の力も借りながら、少しは交流を深められたと思う。しかし、意思の疎通がほとんど出来ていなかったというのが現状であった。やはりお互いの理解を深め、コミュニケーションするには語学の力の重要性を痛感した。まずはさぼっていた英語を勉強しようと思う。

農村体験

農村体験では、イーストパッソー村の方々にお世話になった。農地、僧院など村の中を村長に案内してもらった。そこでは農産物の種類や実際に使用していた農具、村の農業の現状を見せてもらった。驚いたのが、農産物を育てるための水は雨水のみで賄っているという事実であった。水自体が不足している状況では仕方がないことであるが、自然災害が発生した場合、村としての機能を保てるのか不安に思った。そして米が作れないこの土地では、米を買うための現金収入が必要不可欠となる。翌日の勉強会では、自然災害などにより飢饉が発生した場合の危機管理の必要など、一部であるが村の問題点など把握できたと思う。また僧院では、ミャンマーの人々の仏教への信仰の篤さには感心してしまった。他にも、一緒に料理を作るなどして、ほんの一部ではあったが、村での生活を体験できたことは、今後の大学での学びにつながると思う。

文化交流

村、僧院共にとても楽しかった。お互いに笑顔が絶えない素晴らしい催しが出来たと思う。水祭りの踊りでは、手足を逆にして踊る、ロンジが脱げそうになるなど、多大なるご迷惑をおかけして真に申し訳なかった。また僧院での茶道の点前が成功して、本当に良かった。ミャンマーの方々にも日本の伝統文化の一つである茶道の雰囲気を感じていただけたと思う。点前で用いた漆器のお盆はバ

ガンで買ったのだが、日本から持ってきた茶道具と調和した事には驚いた。文化というものは外から様々な文化が入ってきて、それに合わせて自国独自の文化へと昇華していくものであると実感した。この経験から、自国の文化を理解することは、他国の文化を真に理解することにつながるのではないかと考えた。

観光

ポパ山、パコダでの夕日、ヤンゴンの市場など全てが素晴らしく新鮮な体験であった。特にバガンの漆器の精密さには本当に感動した。購入した漆器は茶道具として用いることも試みてみたい。またレストランにあった焼き物も緑の釉がかかったつまようじ入れや蠟燭立てがあり、今度機会があればそれらについても調べてみようと思う。

最後に

今回の植林ツアーでは本当に多くの事を学ばせていただきありがとうございました。短い期間でしたが毎日新たな刺激を得ることができました。このモチベーションを維持して、今後の大学での勉強につなげていきます。

「植林ツアー体験記」

植下 雅也

同志社大学政策学部 3 年

8 月 20 日から 28 日まで短い期間でしたが、MJET の植林ツアーに参加しました。これはそのツアーで私が感じたこと、学んだことをまとめた体験記です。正直に申し上げると、ミャンマーなんていう国に行こう、行ってみたいなどとは今までに私は思ったことはないです。このツアーに参加していなかったら、これから先もまず間違いなく行くことはなかったと思います。しかし、そんな私がこのツアーを終えて日本に帰ってきて一番に思ったことは、行って良かった、また行きたいということです。これは私自身の体験記でもあります、そう思えたことを証明するためのものでもあります。

このツアーの話を聞いてから参加を決定するまで、ほとんど未知の世界への好奇心で突っ走った私ではありましたが、不安がなかったわけではありません。それは水と食べ物のことで、ミャンマーに着いてからもその不安が消えることはなかったです。結果的に体調を崩すことはありませんでしたが、食べ物には人に言われなくても気を使っていました。食事に関して言えば、現地の食べ物に私が馴染めていたのは、ツアーのもう後半だったと思います。ここまでだとなぜ行って良かったと思えるのだと疑問に思われるかもしれません。ですが食事のことを含めて、ミャンマーの文化に触れるということに関して言えば、様々な経験をして帰ってきたと思っています。農村での交流会、漆器などの民芸品、タナカの木を使っの生活習慣などは、私にとって初めてのもののばかりでした。旅の醍醐味の一つである、訪れた国の文化に触れるということについては、これ以上ない体験をすることができました。

次にこのツアーにおける大きな柱であった植林についてです。実際に植林をすることで改めて思ったことは、本当に長期的な活動だなということです。去年に植えた木、3 年前に植えた木を見て、この植えた土地が緑いっぱいになるときはいつなのだろうと思っていました。ただそれでも、これまでに植えてきた木が着実に成長しているのを見ることで、自分が植えた木は次に来たとき、どこまで成長しているのだろうと思うと楽しみでなりません。そう思えることは村の人たちを含め、いろいろな人たちの協力のおかげなので、本当にまたミャンマーに自分の植えた木を見に行きたいと思います。

以上が今回のツアーに参加して感じた大きなことです。この短い体験記では、書ききれなかったことはまだまだたくさんあります。また、苦労したことや辛かったことなど、他にもあるだろうと思われるかもしれません。しかし、そんなことはあまりなく、正直に言えることは、行ったことで後悔したことは一度もなかった、ただそれだけです。

植林ツアー体験記

松尾 雄一

同志社大学大学院 総合政策科学研究科

国際政策専攻 修士課程 2 年

まず、今回の植林ツアーに参加させていただいたことに感謝を申し上げたいと思う。藤村先生をはじめ MJET の皆様、ありがとうございました。

これまで参加したことのない植林作業。それを、一度も足を踏み入れたことのないミャンマーという国で行う。自分にとって初めての要素が組み合わさった今回のツアー。そこで見たり、聞いたり、感じたりしたことは、これまでに経験した海外旅行では決して得られなかったものだった。

今回のツアーの設営・運営は、多くの方たちに支えられているのだと感じた。誤解を恐れずに言うと、上げ膳据え膳の旅程であった。これも MJET の皆様に加えて、現地の Nature Lovers Group の皆様のおかげだと思う。特に代表の U Aung Din には大変お世話になった。ツアー中に、何度も彼の携帯電話が鳴って、その場を一旦離れて電話の相手と話している姿が印象に残っている。私たちの前では終始穏やかな表情だったが、Bagan のホテルの近くのインターネットカフェで偶然出会った時の彼の表情は少し異なった。私のバイアスがかかっているが、一刻も早く前に進めなくてはならない案件を抱えて、多忙を極めてるように見えた。彼の存在がなければ今回のツアーは成立しなかったと思う。

ところで、日本での植林活動というと、建築家・安藤忠雄氏らによる瀬戸内オリーブ基金を思い浮かべる。これは、産業投棄物の不法投棄で汚染された瀬戸内海の豊島の自然を回復するために、オリーブなどの木を植える運動である。豊島や直島、淡路島といった瀬戸内海の島々に、100 万本の木を植えることを目標としている。10 年くらい前にテレビで放送されたドキュメンタリー番組で、安藤氏が語った言葉が印象に残っている。その内容は概ね次の通りである。このようにオリーブを島に 1 本 1 本植えることで自然を取り戻そうとしても、焼け石に水かもしれないのは承知している。しかし、植林活動には「出会い」がある。出会いを通して、活動に参加した人たちの心の中に自然を大切にしようとする思いが生まれ、それが次の世代に受け継がれていけばいいと思う、と。

今回のツアーで出会ったミャンマーと日本の人たちの心の中にも、安藤氏が語ったような大切なものが育まれたと思う。そして、それが次のツアーに参加する人たちに受け継がれて、ミャンマーの木のように大きく成長していくことを祈っている。そのために私一人ができることは限られているが、小さなことからでも取り組めればと思う。

最後に、今回のツアーに参加できたことに改めて御礼を申し上げる。

本当にありがとうございました。

植林ツアー体験記

魚谷 弥生

同志社大学大学院、総合政策科学研究科

国際政策コース、修士2年

今回のミャンマーへの旅を通じて、個人的に農村開発の在り方や国の成長の方向性について考えさせられた。ツアーでは、農村ミャンマーの最大都市ヤンゴンと、観光都市はバガン、そしてバガンの農村を訪れた。ミャンマーの人々は素朴でシャイで信仰心が篤く、町には本当に外資系のお店が少なく、農村では村人同士の格差が小さく、比較的平等。これらが、1週間の旅で垣間見たミャンマーの印象だった。

中でも、農村で見聞きした様々なことが特に印象に残っている。私は3日間過ごした **East Phar Saw** 村での体験から、この村では開発や、ライフスタイルの変化は必要とされていないのではないかと感じ、外部の人間が村の問題を指摘する難しさを痛感したのだ。**East Phar Saw** 村では村人のほとんどが豆類やゴマ等を栽培しており、村人は牛で畑を耕し、牛の糞等を肥料とする原始的な農法を用いている。またバガン地方は雨季と乾季があり、乾季はほとんど農作物が育たず、主食のコメの栽培は行われていない。水道や電気がない、一見貧しいこの村の開発のために、私が最初に思いついたことといえば、「農業を機械化して生産効率を上げる」、「現金収入を増やすために農業以外から収入を得られるようにする」、「豊富で清潔な水源を確保する(現在は村に一か所しかない貯水池に頼っている)」ことなどだった。

しかし実際に村に入ってみると、村人は現在の生活にある程度満足しているように感じた。例えば牛は、耕作用にも水汲み用にも、いざという時の現金獲得手段としても重宝されており、村長さんは機械を使って耕すことに興味を示さなかった。また、村が観光地の近くにあるため英語ができれば近くのホテルやレストランで働いたり、家内工業でお土産物を作って売ったりと、現金獲得のためのライフスタイルができていた。水に関しても、独自の浄化システムがあり飲み水が原因で病気を引き起こしている様子はなく、水には困っていないという話を聞いた。農村体験したメンバーの中でも、私と同じように「自給自足がある程度成り立っている」のではないかという意見が多く、農村体験が終わる頃には、私のイメージした村の開発・成長への課題は、村の事情を知らない先進国の人間の押しつけで、村人にとって不要なものではないかと考えるようになった。

ただ、今後はミャンマー政府が大きく方向転換を図ろうとしているため、村や町の状況が大きく変わる可能性は大いに考えられる。これから民主化や自由化、資本主義の波が押し寄せた時、村人の生活がどのように変化していくのか、どのような成長や変化を望むようになるのか、とても興味深く思っている。個人的には、ミャンマーらしさを見失わず村人たちの手で村の開発を担って欲しいと願う。今後のミャンマーの変化に目が離せなくなりそうだ。

植林ツアーに参加して

古城真理子

東京外国語大学 ビルマ語専攻 2 年

バガンにいたのはたった 1 週間弱だったのに 1 か月くらいはそこにいたような気がします。それだけ馴染めていたバガンだったので飛行機でヤンゴンに向かっている途中はプログラムもほとんど終わり、ほっとしている反面、寂しかったのも覚えています。

実を言うと私は団体行動が得意でなく、(家族以外には信じてもらえないのですが) 人見知りで、さらに植林ツアーに参加する頃はサークルのことにアルバイトのことに限って日本にやり残したことがたくさんあったことも影響して、今回のツアーに参加することに最初のうちは気が進まずにいました。

そういう時はもともと大好きなミャンマービールを飲んでテンションを上げなくては、という強迫観念にとらわれ、昼間からよく飲んでいたので、真昼間からおかしな人だったと思います。すみませんでした。しかし、そんな私にみなさまはいつもフレンドリーに優しく接してくれて本当に嬉しかったです。ありがとうございます。

ところで、東京外大、ビルマ語専攻入学者の中には新入生歓迎会で飲んだミャンマービールでビールのおいしさに気付く、という人も少なくないという、飲みやすくおいしいミャンマービールですが、今回の旅行で日本でのミャンマービールの認知度の低さを改めて感じて、ミャンマービール推進委員会の一員としては少しさみしい思いに駆られました。しかし、それと同時に、みなさんおいしいね、と言って飲んで下さった時の嬉しさも日本に持ち帰ることができました。まだまだ日本では飲める場所も少ないミャンマービールですが、これからも応援して下さったら嬉しいです。

さて、私は今回みなさまのビルマ語要員として役立ちたいという思いで参加したのですが、勉強不足のせいであまり役に立てなかったように思います。申し訳ありませんでした。自分自身、もっとビルマ語が分かれば、という悔しい場面が多々ありました。私が前もって村人と話そうと思い、考えてきた会話と言えば、「この村にはお坊さんは何人いますか？」だけでした。ヤンゴンではお坊さんをたくさん見かけたという経験から、寺院の遺跡がたくさんあるというバガンでもこの言葉は村人との会話の糸口となるだろうと考えていましたが、実際にバガンに行ってみると、遺跡はたくさんありましたが、村ではあまりたくさんのお坊さんの姿は見かけなかったもので、この会話は全く使うことがなく、役立ちませんでした。それよりも「年齢はいくつ？」や「兄弟はいる？」などの普通の会話のほうがよく使えたような気がします。ミャンマーは日本とは違う国なのだからといって人間の興味の対象がそんなに変わることはありませんでした。勝手な思い込みの怖さと異文化におけるコミュニケーションについて身を持って知る良い経験となりました。

前述したように不安を持って参加した植林ツアーでしたが、参加者のみなさまのおかげで最終的にヤンゴンには楽しく、充実した思い出を持ち帰ることができました。1 週間、ありがとうございました。

植林ツアー体験記 「笑顔でいること」

古橋 櫻子

東京外国語大学 ビルマ語専攻1年

私がビルマ語を大学で専攻しようと思ったのにはいくつか理由があった。まず、東南アジアの国々に一度も訪れたことがなかったため、この地域が自分にとって未知の世界だったこと。その中でも一見文字なのか、どうやって書くのか読むのか分からない文字を習ってみたいと思ったこと。そして大学と留学協定を結ぶ、ビルマ研究が盛んなイギリスの大学へ留学することで英語とビルマ語を両方学ぶことができるとともに、植民地として支配した経験のあるイギリスから見たビルマと日本から見たビルマ、という二つの異なる視点からビルマという一つの国を研究することができたら大変面白いのではないかと、思ったこと。ずっと憧れ続けた大学に入学し、ビルマ語に触れる毎日は大変楽しく、充実している。

ある日、同専攻の古城先輩から MJET の植林ツアーの話を知った。ビルマ語を勉強し始めて約三か月。まだ会話できる言葉も少ない。話を聞いた当初は「もっと勉強してからミャンマーに行った方がいいのでは」と迷った。しかし、専攻の教授に相談等をしていくことで、「言葉が完璧に話せなくても、今は今でしか得られないものがきっとある。自分が学んでいる言語が話されている国はどんな国なのか、少しでも知ることができるはず。行って無駄なんてことはありえない」と思い、参加を決めた。また、せっかくミャンマーへ行くのに観光だけを目的に行くのはもったいない、出来ることなら何か役に立つことをしたいという気持ちが強くあったため、私にとって MJET のツアーは理想的なプログラムだった。参加を決めてからは、少しでも現地のミャンマー人とビルマ語でコミュニケーションが取れるようにと、今までの授業で習った単語や文、使ったテキストやプリントを繰り返し復習し、毎日ビルマ語のリスニングを聴いた。

ミャンマーで過ごした日々は濃密だった。パゴダから眺めた夕日、息を切らして登ったポパ山、村の人々との笑顔に溢れた交流会。毎日が、一瞬一瞬が忘れられない思い出になった。中でも、訪れた二つの村の人たちとの植林活動と農村体験コースは私にとって大きな経験になった。ミャンマー人と日本人の二人一組で木を植える、という作業はビルマ語を話す良いチャンスになり、とにかく積極的に自分からたくさん話しかけるように心がけた。最初は通じなかったらどうしよう、と少し戸惑ったが、その時はその時点で適当に笑っていればいいやと思い、ふっ切れた。ビルマ語で話しかけることで相手も笑顔になってくれ、一生懸命聞き取ろうとしてくれる姿に自分自身も自然と笑顔になった。自分のミャンマー名を多くの村人たちが覚えて口に出してくれ、話しかけてくれたことも嬉しかった。特に習ったビルマ語を使ったときに相手に通じた瞬間の嬉しさは今でも

覚えている。自分が日々日本で、大学で学んでいるビルマ語は、初対面の外国人との距離をこんなにも近づけてくれる、最高に素敵なものだと感動した。人と人とを繋げてくれる言葉の重要性、素晴らしさを実感した。

農村体験コースでは一緒にご飯を作ったり、家の中を案内してもらったりアルバムを見せてもらったり馬に乗せてもらったりと、普段生活しては決して出来ない体験をたくさんさせてもらった。また、村の人々と一緒にいて印象的だったのが笑顔である。人をもてなす気持ちを大切にしており、農作業をしている時にご飯を作っている時も家の中で休んでいる時も常に笑顔で接してくれた。日本と比べたら圧倒的に生活は不便で水質などの問題もたくさんある。しかし村の人々たちの笑顔を見ていると、小さなことで悩んだりする日本人よりもはるかに幸せに見えてしまった。笑顔は他人にも、自分自身にも元気をもたらしてくれる。どんな時も常に笑顔でいることの大切さを、村人たちから教えてもらった。

今回実際に訪れる前はもっと衛生面がひどく厳しい環境だと想像していたが、ミャンマーは良い意味で私を裏切ってくれた。また、質問されたのに意味が分からなくて答えられなかったことや、もっと話をしたいのに聞けない、悔しい思いをしたときがほとんどだったため、今後より一層ビルマ語に励もうとモチベーションが上がった。そして、次ミャンマーへ行ったときはもっと村の人たちと色々な話をして、もっと相手のことを知りたい、自分のことを知ってもらえるようになりたいと思った。このツアーに参加したことでさらにこの国に対して興味、関心が湧いたとともに、ビルマ語を専攻して本当に良かったと思った。

このような気持ちになれたのは温かく迎えてくれた村の人々だけでなく、年齢関係なく対等に接してくれた参加者みなさんのおかげである。全員で一生懸命取り組んだ毎夜の踊りの練習、星空を眺めた夜。毎日行動を共にし、笑顔に溢れた9日間を私はずっと忘れません。素敵な時間をどうもありがとうございました。

「ミャンマー植林ツアー体験記」

高橋力也

宮城大学、食産業学部 フードビジネス学科 4年

食事

全体的に、美味しかった。お米を使った麺料理がとても美味しかった。ジャポニカ米を使用して、同じような製法で作った場合、どのような製品ができるのだろうか。一般的なミャンマー料理は、お米、鳥、ヤギ、豚、野菜を使用したスープ、小魚料理。品数が多く、食事バランスが良かったと思う。しかし、脂が多い。都市部では手で料理を食べていなかったが、農村に行くと手で料理を食べていた。

植林

植林を人生で初めて行った。ただ土を掘って植えるのではなく、水が溜まるように正方形の穴を掘り、有機肥料まで入れる徹底ぶりには驚きを感じた。過去に植林され枯れている木々があった。植え付け角度、穴の深さ、植林後の水の管理の重要性を感じた。

風景

パゴダで夕日が照らす一面の景色に感激した。その後の、目を閉じ無言のまま時を過ごす経験は、心が癒され、清らかになった。静寂の素晴らしさを身を以って感じた。ポパ山からの景色は、絶景であった。日本では見ることのできない地平線を見ることができた。世界三大仏教遺跡であるバガン遺跡とヤンゴンのシュエダゴンパゴダのきらびやかさには言葉がでなかった。その空間にただいて、目には見えない力をいただいたような気がした。世界にはこんなに素晴らしいものが数多く存在する。いつしか世界をまたに駆けるビジネスを展開し、まだ見ぬ未開の地に飛び込んで行きたい。

交流会

サッカーでの交流の際、選手である村人の輝いた目を見て、スポーツの力を強く感じた。乾燥しきった砂の上での試合、普段以上に体力を消耗した。グラウンドの状態は、サッカーを行う上であまり適した環境ではないと感じた。技術向上にも影響があると考えた。村の人たちと共に歌い、踊ったことで、ミャンマーの文化を感じることができた。また、些細なことでも腹の底から笑ってくれるミャンマー人の温かさを肌で感じた。小学生くらいの女性の踊りのクオリティの高さには驚愕した。

農村生活体験

個人旅行では体験することのできない、農村体験は貴重な経験となった。村の現状や村人の生活リズムを聞くことができた。作付け品目の偏り、効率的な水の供給、労働力の有効活用、まだまだ問題点は山積みではあるが、潜在能力は十分にあると思う。

植林ツアー体験記

山本林彌

東京大学新領域創成科学、環境学

国際協力専攻、修士1年

今回を逃したらもう訪れることはないだろう。そう思い、植林ツアーへの参加を決めた。ミャンマーといえば、アウンサンスーチーといった程度の知識しか持っていなかったが、訪れてみると、様々な魅力があることを知ることができ、また行きたいと思うようになった。

今回のツアーの目玉は植林であった。ただ、正直に言うと、思っていたよりも大変な作業ではなかった。そう思うのは、村の人々が穴掘りから水撒きまで、全面的に協力してくれたおかげである。私自身は、言葉が通じないながらも身振り手振りでなんとか意思疎通を図りながら苗を植えたり、子供と一緒に水の入ったバケツを持って走ったりと、植林を楽しむことができた。また、自分の名前前のついた木を植えられたのも、感慨深い。しかし同時に、これが村の人々にとって負担になってしまっていないかと考えてしまう。数個掘るだけで重労働だった穴を数百個掘ったり、水が少ない地域で生活用水を木を育てるために使ったり、さらには今後木の面倒を見たりするのは、全て村の人々である。今回植えた苗が育ち、将来村の人々のために何倍にもなって還元されることを願うばかりである。

植林以外にも、様々なイベントがあった。次に観光を挙げる。バガンでは遺跡群と星空が印象的であった。高い建物がなく、多数のパゴダが点在しているという風景は、日本では見られないものである。藤村先生お勧めの、パゴダの上から見るサンセットもすばらしかった。バガン上空を気球で観光するというツアーが存在するという話を聞いたが、ぜひ参加してみたいと思った。また、夜になると真っ暗になるため、星空が美しかった。天の川を見たのは久しぶりであった。バガンでは時間の流れがゆっくりで、非常に居心地が良かった。また、ヤンゴンでは、何と言ってもシュエタゴンパゴダが圧巻であった。ただ、バガンでもそうであったが、仏像のまわりの電飾はいかかなものかと感じたのは、私だけではないだろう。

他にも村や僧院での交流会や、今回が初めての試みだったという環境・開発コースでのオプションプログラム、酒を飲んだ直後に行なった、炎天下の砂地での村選抜チームとの全力のサッカー等、面白くて刺激的で、そしてためになるイベントばかりで、1週間があつという間に過ぎていった。幸い体調を崩すこともなく、ミャンマーを十分に満喫することができた。このツアーをコーディネートしてくださった藤村先生、他の参加者の皆様、ミャンマーの皆様に感謝申し上げたい。

一般社会人参加者
植林ツアー体験記

「村人の笑顔とバガンの文化力に魅せられて」

岡本由美子
同志社大学政策学部教授

渡航する前から、ワクワクしていた。もちろん、ミャンマーが始めて訪問する国であったこともあるが、この国ほど、渡航歴がない人とある人が抱いている国のイメージにギャップが存在する国も珍しいからだ。期待通り、いや、期待していたよりもはるかに多くのものをこのツアーを通して得ることができた。以下、①植林体験、②国際交流事業、③環境・開発コースへの参加、及び、④観光、ごとに体験談を簡潔に述べ、最後に⑤総括を行いたい。

① 林体験

Nature Lovers 代表 Aung Din 氏による、「植林の5つの効用」をご説明いただき、植林を通じた環境保全の重要性を少なくとも頭では理解でき、大変、有益であった。しかし、炎天下での作業自体は予想外に大変であった。体力のなさを感じた。また、最初の5分を除き、植林に慣れている村人が作業をずんずんと進めてくれたおかげで時間的には短い時間で終わることができたものの、本当にそのやり方でいいの？と疑問に思うこともあった。植林を始める前に、村人と我々がともに、目の前で模範的植林を見て、その後、植林を実際に行うことができれば、なおよい植林が行えたかなと思われる。なお、私が寄付をした10本の木（ユーカリ）は、Than Sin Kyae 村の小学校の建物の横に植えられた。村人、及び、同じ班（マンゴ）の人たちには大いに助けてもらった。今後が楽しみである。（しかし、その場所はかなり地面が乾燥していて、どこまで育ってくれるか、若干、心配でもある。）

②国際交流事業

サッカーの親善試合を含めて村人との国際交流事業は極めて楽しいものであった。自分自身も童心にかえった気持ちで参加をした（サッカーは体力的に無理であったが）。まずは、老若男女を問わず、村人が外国人である我々を快く受け入れ、かつ、心底、ともに喜び、楽しんでくださったことには感謝したい。村人（特に、子供）の素敵な笑顔を見ながら終わることができ、これに勝る土産話はないと感じた。国際交流はお互いまずは楽しくなければ意味がないことを痛感した。ただ1つ心残りであったのは、最後まで、水祭りの3つ目の振付を私自身が完璧にマスターできなかったことだ。頭ではわかっていたつもりでも、体が言うことを聞いてくれない。残念であった。前列の端で踊りを乱してしまって日本人の参加者の皆さんには申し訳ない気持ちで一杯である。

③環境・開発コース

今年からスタートした新メニュー、環境・開発コースは実に有意義であった。今後、大学での教育活動に大いに活用させていただきたいと考えている。Aung Din さんの通訳

で村長さんとお話をしたが、①水、エネルギー、食料といった、人間にとって生存するためにはなくてはならない要件の賦帯状況、②経済状況、及び、③村の行政組織と政府との関係、が大雑把ではあるが把握できた。環境による開発の制約の大きさを感じつつも、貧困は「社会」によってつくられるものであることもまた痛感した。次の日の反省会では藤村会長、岡田さんのリードのもと、村の状況がよく把握できたのではないと思う。

④観光

パゴダ、ポパ山、イワラジ川、どこもすばらしい光景であったが、私が一番心に残ったのは、漆竹細工工芸店である。昨年の暮れ、タイを訪れた際、日本人向け土産物店でミャンマー産のカップ（非常に薄い、多目的用のカップ）が売ってあったのだ。何もタイでミャンマー産を買わなくてもいいのでは、とタイ人に言われ、それもそうだと取りやめたのだが、後で後悔をした。今回、ようやく、「再会」できた。Aung Din さんによると、11 世紀にバガン王朝とともに始まった技術らしく、その後、ある一族がずっとその技術を伝承してきたとのことである（我々が訪問をした店）。

京都に帰ると早速、ミャンマーで購入をしたカップと大皿を持って、近くの漆器店に向かった。100 年近く京都の街中で商いをしている老舗である。一目見て、ミャンマー産の漆器を気に入ってくれた。絵付けの細かさには感嘆をしていた。また、形状的にはカップがとりわけ珍しいそうである。ただし、これは京都の漆とは異なり、日本では香川県高松市で発展した「蒔醤」と言われ、早速、インターネットで調べてみた。すると、次のような興味深いサイトが見つかった。「蒔醤」の技法はミャンマーで始まり、タイ、ベトナム、中国を経て、日本にも室町時代に伝わったとのこと。千利休も興味を持っていたようである。（<http://www.morishige-furniture.co.jp/urushi-kagawa/urushi.html>）。ここまでくると、ミャンマーの技術力、文化力には脱帽する思いで一杯である。余談が長くなり、すみません。

⑤総括

NGO の国際協力プロジェクトへの参加を通して、社会貢献を果たすとともに、途上国の現状を認識してもらいたいとの強い思いから、本植林ツアーを私のゼミ生に勧めるとともに、私自身も参加させていただいた。もしかして、結果的には私が一番、はしゃいでいたかもしれない。1 週間という短い期間ではあったが、上述のように、本当に多くのことを学び、かつ、大変楽しかった。

最後に、何回も京都まで足を運んで下さり御説明をいただき、かつ、このような貴重な機会を与えてくださった藤村会長に厚く御礼を申し上げます。藤村さんのお力なくしてこのような貴重な機会を得ることはありませんでした。ありがとうございました。また、今回のツアーでは多数の素敵な参加者の方とご一緒させていただくことができ、大変、幸運でした。いろいろなことを学ばせていただきました。本当にありがとうございました。

ミャンマーでの植林ツアーが如何に楽しかったかについては、他の参加者の体験記を読んでもいただければ十分にわかるため、私の稚拙な文章を披露するに忍びない。そのため、私は、今回のツアーから特に強く思った点について記載することとしたい。

それは、所謂パッケージツアーで途上国を旅行したことによって感じたことである。私はこれまで主に約 20 カ国の途上国をバックパックや自転車で旅してきたが、このような所謂パッケージツアーという手段で途上国を旅するのは初めてで、とても新鮮な体験だった。明日の宿や移動手段に頭を悩ませる必要もなく、その日の予定をこなすことができ、何も考えず（といえ言過ぎではあるが・・・）楽しむことができる（もちろん、藤村先生や神田さんを初めとする多くの方々がマネジメントして下さったおかげではあるのだが）。そのため、社会人の日々の疲れを癒すのにはもってこいのシチュエーションで、今後パッケージツアーにハマりそうな気がしてならない。もちろん宿泊先には、プールとマッサージが付いていることが重要なのは書くまでもないことだ。

ただ、その一方で、説教くさい発言を許していただけるのであれば、特に学生の方々には、途上国をバックパックで旅行して途上国の魅力を肌で感じてほしいと思う（すでに高橋君には何度かこの話をしており恐縮ではあるが・・・）。やはり、パッケージツアーと自身の足で途上国を旅するバックパックは大きく異なる。小汚い宿、異臭を放つ通り、喧騒、スリ、詐欺師等、行方を阻む障害に最初は戸惑いながらも、それらを乗り越えることを楽しめる瞬間を経験していただきたい。私が途上国に魅力を感じているのは、そのような瞬間に垣間見ることができる、人間味あふれる人々の素顔に触れることができるからだ。そして、その国について語ることができるのも、そんな彼らの日常の顔に接した後にできることだと思う。そういう観点からは、私は参加しなかったが、農村体験プログラムはミャンマーの人たちの素顔を見るためにはとてもよい機会だったのではないだろうかと思われる。もちろん、代わりに行った環境と開発プログラムも私の今後の業務で役立つものであり、貴重な体験だったと認識している。

さらに、途上国をバックパックで旅して得られるものは、それだけではないと思う。このツアーの初めに藤村先生が紹介して下さった、加藤氏の本にも記載してあるように、途上国を旅することで日本の魅力に気付くことができるのだ。実を言うと、私も加藤氏と同様に日本が嫌いで世界を旅したクチではあるのだが、世界を旅行することで、日本に誇りを持てたり、日本を好きになれたりしたのだ。このような経験を、比較的時間に都合をつけることができる学生のうちに行っていただきたい。

ミャンマーでのアツイ日々では、他にも忘れることができない体験が沢山あった。昼ビールの後のサッカーで吐きそうになったこと、誰に披露するわけでもないのに水祭りの踊り以上に練習を繰り返したピラミッド、綺麗なミャンマー女性に心奪われてはしゃいでいたこと、交流会の子供たちが可愛いうえに、披露してくれた演技の完成度がとても高かったこと、パゴタの上から見た夕日がとても綺麗だったこと。すべていい思い出として心に残っている。

このような素晴らしい時間を共有することができた全ての参加者と、開催者の藤村先生に感謝の言葉を述べて体験記を終えることとしたい。ありがとうございました。以上

植林ツアー体験記

村上 峻一

国際協力機構、農村開発部

今回の活動では、短期間ではあったものの、観光では決して体験することの出来ない住民の暮らしに触れることが出来、且つ、その土地の人々と共に汗をかくことで、これまで馴染みのなかったミャンマーと言う国について理解を深めることが出来た。また、植林やその他の開発の現場を見ることは、彼らにとっての開発とは何なのかを考える機会となった。

植林が行われた場所は、ミャンマー中央に位置するバガン地域。気候は比較的乾燥しているものの、一面に砂漠が広がるような気候区分ではなく、私達が訪れた雨季には天水で豆類やメイズが栽培されていた。ただし、土壌は砂質で保水力が低く、明らかに降雨量が制限要因となるような土地であった。このような土地での植林は、土壌保全や自然保護、周辺環境の改善や薪炭材の供給等のメリットをもたらす一方、住民には定期的な水やりや適切な管理等のコストが求められていた。特にこの地域では水源が限られており、水そのものが非常に貴重である上に、日本ではおなじみの水道のような設備がないために、十数分かけて水源から水を運んでこななければならなかった。樹種も、ユーカリやチークなど、短期的な利益を産み出すものではなかったため、当初、私はこのように短期的に目に見えるメリットが必ずしも多くはない活動に対して、どれほどミャンマーの人々は理解を示し主体的に活動に取り組んでいるのか、疑念を有していた。

しかしながら、そのような心配は全くの杞憂であり、現地の住民の方々は非常に主体的かつ積極的に本活動に取り組んでいた。このことは、一つには、藤村先生と現地コーディネーターのアウンディン氏を始めとした MJET の方々のこれまでの活動に対する住民の信頼がポジティブに働いていたようである。私たちはどの活動地でも現地の人々に非常に快く迎えて頂き、交流会を含め、現地の住民と非常に楽しい時を過ごすことが出来た。

また、彼らの価値観も強く起因する様に思われた。彼らの生活は電気も水も日本と比べると十分にある訳ではなく、物理的にみると日本に比べると非常に貧しい。しかしながら、彼らの生活は既存のもので十分に成り立っており、何より彼ら自身が過度に物理的な豊かさや短期的な利益を求めているように感じられた。そこには、利益を追い求めせわしく時間が流れていく世界ではなく、「足るを知る」人々によって構成される、ゆったりと時間の流れる居心地の良い一つの成熟した空間があった。左記のような生活・価値観の基、彼等は利益追求のためではなく、複合的な観点から、本活動に対してもインセンティブを持っているように感じられた。

ミャンマーについて理解をしたと言うには余りにも短い期間ではあったが、今次活動を通じてミャンマーの人々の質素で穏やかな生活や価値観に触れ、親近感を覚えた。本活動が今後も持続的に実施され、少しでも彼らの生活が向上していくことを心より祈念している。

以上

このツアーに参加するのはこれで2度目。初めて参加したとき、新しい出会いと発見に満ち、参加者同士が強い絆で結ばれ、夢のような時間を過ごしました。もう2度とあのような感動は得られまい、そんな確信が、これほど容易に崩されるとは……。2度目だからこそ味わえる現地の人々との再会の喜び、自身が植えた木がパートナーの女性によって大事に育てられ、自身の背丈以上に立派に育っている感動、新しく出逢った参加者と旧知の仲のように親密になれる楽しさ……。2年前の鮮明な記憶と照らし合わせながら、夢の続きを見た心地でした。

2年前、自身が木を植える農村の状況は目で見た範囲でしかわかりませんでした。ところが今回、通訳つきで農村に聞き取り調査を行ったため、村人の生活がおぼろげながら見えてきました。もっとも驚いたのは、食用で生産しているのは豆（種類は多い）のみで、豆と引き換えに市場で野菜や米を調達していることでした。異常気象や天災に加え、豆特有の病虫害などで収穫量が制限されたとき、この農村は、これまで経験したことのない試練に直面するのではないか、そんな危機感を覚えました。また農業用水を天水のみに頼っていること、わずかに育てている野菜等の種の蒔き方が適当で効率的な収穫に結びついていないこと、飲み水以外の生活用水を2年前枯渇していた村内の小さな池に依存していることも留意すべき事実でした。

水や農業だけではなく、私たちの目から見ればこの農村には多くの問題が散見されます。一方、村人たちはそれほど問題視する様子もなく、日々の生活を営んでいるようです。日々の生活に不満を抱いていない途上国の農村、そんな風景はこれまで幾度となく見てきました。しかし、それにも関わらず、どうして突然現れた日本人のエコツーリズムに付き合っ、彼らは木を植えるのでしょうか？植えた木に長い時間かけて水をやり続け、大事に育てるのでしょうか？木を植え、育てるということは、その利益が目に見えにくいだけでなく、かなり大変な作業が日々の生活にのしかかってくるはずです。今の生活をそれほど問題視していないなら、なおさら彼らが木を植え、大事に育てているという事実が不思議になりません。2年前にも同じ疑問を抱き、自身の中で答えを見出したはずだったのですが、すくすくと育って大きくなった自分の木を前に、改めて大きな疑問を抱きました。

国際機関や各国援助機関による大型の植林事業でさえも、事業終了後の持続性に大きな課題があると聞いています。私が仕事の関係で行ったベトナム北西部の山岳地域でも、外国の植林事業が失敗している話を聞きました。「木を植え、植えた木を維持できた家族に報酬を与える」、そんな政策がとられたそうですが、プロジェクト終了後、予算が底を尽きて村人たちにお金が支払われなくなると、彼らは育ててきた木をことごとく伐り倒したそうです。ミャンマーでも木を維持管理するためのお金は支払われていますが、作業量に比して微々たるもののはず……。

「彼らはどうして木を植えるのか？」通訳にそう問うと、「木を植えることの良さをわかっているからだよ」と返ってきます。果たして本当にそうか？木を植える効果のどこに関心を持っているのか？果たしてはじめから木の良さを理解していたのか？どうすれば植林事業を途上国で成功させられるのか？何か大事なヒントがこの地にありそうで、新しい発見と夢の続きを求めて、また参加できたらいいなと考えています。2年後に。

植林ツアー体験記

川瀬翔平
財務省理財局

MJET との、ミャンマーとの出会いは二つの偶然からだった。一つは、「ミャンマーという国への旅」（エマ・ラーキン著、大石健太郎訳）との出会い、もう一つは、たまたま再会した大学時代の学友が2年前 MJET の植林ツアーに参加していたことを知ったことである。そのときの私は、上述の書籍の影響もあり、ミャンマーといえは一切の民主化運動が抑圧された軍政であり、潜入したジャーナリストが命の危険に晒されながら活動しており、閉ざされた国という程度の認識しか持ち合わせていなかった（後に知ったことだが、ミャンマーでは 2010 末に 20 年ぶりの総選挙により民政移管がなされ、以降、着実に民主化を進めている）。少なからずミャンマーという国に興味を持っていた私は、2年前に参加した友人に後押しされ、今回、MJET にお世話になることにした。

結論から言うと、MJET と現地の Nature Lovers、現地の村の方々に支えられた今回の植林ツアーを通して、ミャンマーという国は私の最も好きな国の一つになった。植林活動や農村体験を通して、私なりに観察したミャンマーは、美しい仏教遺跡を今に残すなど素晴らしい文化を持ち、私たち外国人を温かく迎えてくれる寛容さを持つ国だった。また、民主化への歩みを速めているなかで、ミャンマーは経済の活性化も進展しつつあり、人々は生き生きとしていた。

さて、このたび我々を温かく迎え入れてくれたミャンマーであるが、私が感じた課題も記しておきたい。その一つは、MJET が行う植林活動に関わるものである。資本主義社会に接し、経済活動が活発化するようになった地域においては、往々にして地域に偏在する自然などの公共財産の管理上の問題が生じる。今回植林活動を行ったバガン地域のタンシンチェ村やイーストパッソ村では、料理や燃料としてはすべて薪を使用していた。現状は問題が少ないようだったが、経済が発展、人口が増加していけば、木々の使用上の管理も必要かもしれない。

また、村経済のリスク管理においても、少なからず対処すべき問題があるように思われた。イーストパッソ村での農村体験において、村の方々の生活のほんの一部を体験させていただいたが、全体として天候など自然に依存し過ぎた経済であると感じることとなった。完全な天候依存型農業や雨水や川の水のみを使用した食事、また村の近くに一つも金融機関がないと聞いたときには、少なからず驚いた。こうした状況は近いうちに改善しなければ、今後、天候などに大きな問題が生じたときに死活的に重大な問題を引き起こすのではないかと感じた。

最後になるが、MJET の植林ツアーでミャンマーを知れたことは本当に幸せである。実のところ、上記のような課題はあるが、彼女らは日本人よりもよほど豊かに生活している。心に豊かさがあった。我々の訪問を心から歓迎してくれ、美味しい食事でもてなしてもくれた。何より、一緒に植林で汗を流した現地パートナーのタタウーさんや村の方々とは、片言のビルマ語で腹を抱えて笑い合い、深い絆ができた。

本ツアーは、将来のミャンマーの発展、課題解決に日本・日本人として役に立ち、また、親しい隣人であり続けたいと感じるすばらしい旅となった。このような機会を与えていただいた、MJET の藤村先生や現地のアウンディンさん、そしてこの旅と一緒に盛り上げた仲間の皆さんにはここに深く御礼申し上げたいと思う。

植林ツアー体験記

加賀美 英子

国立国際医療センター

今回、このツアーの話を聞いたときすぐに参加を希望しました。というのは、「ミャンマー」、「植林」という今まで私の人生には出てこなかったキーワードに興味をもったからです。またこのツアーのコンセプトである Eco-tourism、すなわち植林活動＋現地の方々との交流＋観光という要素が盛り込まれており、ミャンマーを多角的に知る良い機会になると考えました。今振り返ってみても、毎日が新鮮で充実した一週間だったと感じます。その中でも特に印象に残った3つの点について述べます。

1つ目は植林活動です。今年は全部で1200本、一人あたり60本弱の苗木を植える計算でした。かなりの重労働を覚悟していましたが、村の方々が植林に慣れていたために作業は思ったよりも楽しく終了しました。また植林したエリアにはゴミ（プラスチック、ビンなど）が散乱していましたが、村の人々を中心に積極的に回収をしていました。将来的には彼らが緑を守り、植林エリアだけでなく村中に落ちているゴミも片付けるなど自発的な取組みが根付くことを期待しています。

2つ目はバガンの景色です。パゴタの階段を素足で登り、パゴタ上部の石畳に座って日没を待ちました。11世紀の遺跡でもあり、仏教徒にとって神聖な場所をこんなに肌で感じるとは思っていなかったので改めて敬虔の念を抱きました。また夕日に照らされたパゴタの寺院群には言葉にはできない感動がありました。世界三大仏教遺跡ではありますが、まだ世界遺産には登録されていません。この先もミャンマーの宝としてとしていつまでも大切に遺跡を守ると共に、Mr. Aung Din が話していたように、そこに住む人々の生活の質も向上させる必要がありバランスを考えさせられました。

3つ目は私が出会ったバガンの人達です。子供達は元気で明るく、村の人達は温かく穏やかで人との絆を大切に生活していました。東京ではあまり見られないコミュニティのつながりを農村体験では特に実感しました。私達から見れば彼らの日常生活は「西洋化」されていない部分も多く「発展」していないところもあるでしょうが、便利になった我々の今の生活が絶対ではないことも改めて感じました。

今回のツアーではミャンマーを観光しただけではなく、植林活動・農村生活体験を通じてバガンの人々の暮らし、内在する問題、問題へのアプローチを知り、皆で考える機会を持つことができました。医療に従事する者の意見ですが、今後は環境問題の他に保健衛生分野にも問題提起できたら嬉しく思います。

最後に、このような貴重な機会をつくって下さった Nature lovers の方々、MJBPA のスタッフの方々、MJET の会員の方々そして藤村先生には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

植林ツアーに参加して

下野 直子
ウエルシア関東

今回の植林ツアーは私にとって特別な旅になった。これまで観光でしか海外旅行をしたことがなく、参加型の旅行は初めて。またミャンマーについて、植林についての知識も全くない。まさか自分の人生でミャンマーに行く日が来るとは思ってもみなかった。そんな中参加した今回のツアーは驚きと発見の連続だった。

参加してみてまず驚いたことは人々の温かさである。これまで、ミャンマーは治安が悪いというイメージがかなりあり、参加に当たって家族や友人からはとても心配された。しかし、実際のミャンマーは、現在、政治的に安定しており、人々はみな穏やかで友好的、そして少しシャイな国民性だと感じた。

植林活動や交流会を通じて、現地の村人との交流はとても有意義な時間であった。言葉は通じなくても共同作業をすることで心は通じ合えたように感じた。現地の方々は植林にとっても協力的でパートナーは率先して植林を行ってくれた。植林後の水やりはとても大変である。水場まで何度も往復してくれている姿に頭が下がる思いであった。また、水祭りの踊りなど、交流会の出し物の練習は大変だったが村の方々に喜んでもらえた。ジェンガはすぐにマスターできて村の方にも参加してもらえるのでとても盛り上がった。

また、バガンの自然は本当に美しく、感動した。パゴタから見た夕日、夜の星空の下、藤村先生が流して下さった曲を聞いた夜、ポパ山からの眺めなど、忘れられない風景が沢山ある。今回の植林活動がそんなバガンの自然を守るために少しでも役立てばと感じた。

今回のツアーを通じて、いろいろなことを感じた。日本での生活と比較すれば貧しいかもしれないが、ミャンマーの人々は日々の生活を穏やかに楽しんでいる。村の隣家との垣根がほとんどなく、オープンな家での生活は東京生活にはない温かさを感じた。ボランティア活動に参加したと言うよりは、ミャンマーから多くのものを得た旅であった。また是非訪れたいと思う。今後は自分の専門である医療の現場も是非見てみたいと感じた。

藤村先生をはじめ、今回のツアーで一緒させて頂いた皆さん、本当に素敵な時間をありがとうございました。

植林ツアー体験記

野口 彩

Eco Abeam

今回は2回目の参加であったが新たな発見と、心の癒しを得た旅であった。正味3日と短かったものの、村の人々との交流、そしてバガンの自然を体感することで、非常に充実した時を過ごすことが出来た。また、植林作業や水祭りの踊りなど、ツアー参加者と目的や意識を共有できたことも充実感の一要素になったと思う。

第一日、8月21日

タンシンチェ村で2年前に植えた木々に再会。大きく育った木もあればそうではない木も。土壌や木種による差が大きいようだ。日本国内での植林との違いを感じた。村の人々、小学校の先生との再会も嬉しかった。2年前はお姉ちゃんに手をひいてもらっていた子が、今回は弟の手を引く立派なお兄ちゃんに成長していた。・村でご馳走になった昼食はとても美味しかった。色んなおかずをご飯と混ぜていただくお母さんの味。アンチョビ、塩辛のような一品がとても気に入った。夕暮れ時にパゴダに登り、夕日が沈んでいくのを鑑賞した。人が周りに殆ど居ないのでその空間を独占できる。非常に幻想的で贅沢なひと時を過ごした。

第二日、8月22日

朝、Forestry Dept.の方からバガンの植林活動、環境についての説明があった。韓国のKOICAとのプロジェクトを紹介してくれた。環境と貧困のジレンマの関係を考えると、プロジェクト、スコープの設定はいろいろ有り得るなぁと感じた。初めてイーストパッソーの村へ。1年前に植えたユーカリの木が既に林を形成していた。植林作業は村人達が段取り良く穴掘りや苗木植えをサポートしてくれたので、順調に終わることができた。言葉が分かればもっと楽しめただろうにとちょっと残念。村の人が生活（飲料・農作物用）に使用する溜池を訪れた。村の中心部からは結構離れている。自分は1缶もろくに運べないが、小さい子からお年寄りまで軽々と2缶を運ぶ。水汲みの大変さを実感した。バガンの星空はものすごく大地に近い。プラネタリウムのようなようである。次回は星空マップを持参したい。

第三日、8月23日

イーストパッソーの村で朝から植林活動。晴れ間が出るとやはり暑いが、私の植林パートナーがリードしてくれ、無事に終了。彼は20歳と若いがいしっかりしている。木は村の人の家の敷地にも植えた。元気に育ててくれそうだ。午後、タンシンチェ村で村の青年とのサッカーゲームが開催された。砂のフィールドでの運動はかなりきつそうだ。日本チームは負けてしまったが、かなり盛り上がった。小学生のちびっ子も応援に参加。白熱した試合であった。植林サイトにプラスチック系のゴミがちらほらと残っていたことが気になった（焼いた後の残りに見える）。バガンや村のゴミ処理の方法やインフラについて知りたくなった。

第四日、8月24日

ヤンゴンで Thin Thin Yi さん、Moe さん、福永さんに再会。Thin Thin Yi さんが観光に付き合ってくださった。活気ある街の散策を楽しんだ。美味しいモヒンガーのお店にも連れて行ってもらった。ヤンゴンでは計画停電が日常的にある。P C のデータが途中で飛んだり、結構仕事に支障が出そうだ。・楽しかった旅も今日で終わり。心地よい疲労感と心一杯の満足をお土産に帰路についた。

植林ツアー体験記

福永 喜朋

(NPO) ソーラーエネルギー普及促進協会会長

1. 日程

8/20 (土) 6:10 百合丘自宅発。6:30 新百合丘発、成田空港直行バス。8:20 成田着。出発迄 2 時間 25 分もあるのに、ヴェトナム航空チェックインカウンターは 5 列の長蛇の列。夏休みのせいだろうが、家族連れが多い。1 時間かかってチェックイン完了。10:45 成田発、機内は 90% の満席。15:31 ハノイ着、所要時間 4:46 時間。ロビーで関空から来た松尾雄一さん（同志社大）と合流。20:51 ヤンゴン着。Mr. Aung Din の出迎えを受ける。皆さん（TG 便）の到着を待って、22:31(20:01L. time)Asia Plaza Hotel 着。日本自宅出発以来、ヤンゴンホテル迄合計 16:21 時間の長旅だった。

8/21(日)～8/23(火)Than Sin Kyae 村、East Phar Saw 村訪問し、再会を喜び、植林を実施。8/23(火)15:13 Than Sin Kyae 村から皆さんと別れ、1 人ホテルへ戻り、19:36Bagan 発 21:30 Yangon 着。

8/25 (木) 日本大使館（ヤンゴン）訪問。「ODA 草の根無償資金援助」の件で事情聴取。8/26 (金) 夕方、皆さんとタイレストランで合流。8/27 (土) 9:30～12:30 僧院訪問。19:02 ヤンゴン発。8/28 06:56(Japan time)成田着。10:12 帰宅。

2. 若木の成長の速さに驚きと感激

2010 年 8 月に植えたユーカリの若木が、1 年で 2m 位に成長し、全体が林のようになりつつあるのを見て驚きと共に感激した。5 年もすれば立派な森になるだろう。我々のコンポスト部分のす掘りと有機肥料を底に施してから若木を植えた事と村人による乾期中の水やり支援が効を奏したのであろう。チークの若木も 1～2 年で大きな葉をつけ逞しく成長しており、喜びを与えられた。

3. 掘削用工具整備の必要

今回の Than Sin Kyae 村、East Phar Saw 村の植林場所の土壌は、1～2 年前に比べ非常に硬く村人による 70cm 角の掘削も浅く中心部コンポスト部分も浅かった。植える前に我々がす掘をしたが、工具が不足している。幅の狭い (6cmx10cm) の鉄板が木製の柄に取り付けられたもので、柄の先端に短い水平の木部品が備わっていない、つまり柄全体で T 型になっていない為、手の力を強く入れられず掘削に多大の時間を要した。先端の尖った鉄筋棒 (40cm、19~22mm dia)、バール (鉄製釘抜き 40cm)、スコップ、つるはし等の準備がぜひ必要である。

8/22 (月) 午後の Than Sin Kyae 村では、MJET メンバー各位が寄付した (小生分) 5 本の若木を農家の庭先、道路沿いの生け垣に植えたが、土質も柔らかく、すでに掘削済みのコンポスト部も十分な深さがあったので、部分的に鉄製バールで修正後容易に植林出来た。住人の老夫

婦の協力もあり、短時間に完了出来た。土壌が柔らかければ、作業は容易となる。来年の成長を見るのが楽しみである。農家の生け垣に植林したのは良いアイデアだった。なぜなら給水が定期的に得られるからだ。今後もこのアイデアは続けたい。

4. レクチャーの開催

8/22 Thazin Garden Hotel にて、Mr. Aye Thiha, Director, Royal Tree Service Co., Ltd. による講演があったが、Green Development のテーマで有益だった。今後も続けることを望む。

5. おわりに

今回は、同志社大から岡本由美子教授を始め 5 人の学生が新規に参加し、合計 22 名の大グループツアーとなり、大いに盛り上がった。小生も、若い学生さん達から、素晴らしい多くのエネルギーを頂いた。誠に有難い事である。特に、最後の 8/27 僧院での、日本ミャンマー若者によるイベント及びミャンマー若者との車座対話は楽しかった。

今後の MJET の更なる発展を願い、ミャンマーとの友好を更に発展させる事に、小生も貢献したい。

以上

植林ツアー体験記

鈴木慶一

日立市立日立養護学校

3年前に、JICA筑波のお世話で教師海外研修に参加しラオスに行きました。そこでは、今後の夢を実現するためのとても貴重な体験ができました。また、3月の植林ツアーの視察に長女が参加したこともあり、このツアーにかかる思いは、熱いものがありました。

印象に残ることの一つ目は、ツアーの主目標である植林です。村人と協力して、穴を掘ったり、苗を穴に入れて土や堆肥をかけたり、ネームプレートをつけたりしました。村人もそれぞれのペースがあるので、いろいろな方と共に一連の植林活動をするのは自分の精神の柔軟性を試すのに貴重な体験だと思いました。また、自分の名前が記された苗木をある農家の庭に協同で植え、写真撮影をしたときには、ミャンマーの大地に自分か関われたと感じました。農家の方々が、「家に入って休んでいきませんか」と手招きで誘ってくれたことが、ミャンマー人の温かさを感じるひとコマでした。

二つ目は、村人との交流です。水が不足している乾燥した大地に住んでいる村人が、思い思いの衣装に身を包み郷土の芸能を披露してくれたことに驚きました。小学校の低学年にあたるくらいの子が、演技する姿はその純真さに感動しました。また、私達がミャンマーの踊りを披露すると、心の底から歓声を上げてくれました。日本人が、ミャンマーの芸能に親しんでいることが心を捉えたのだと思いました。植林ツアー（ネイチャーラヴァーズ）チーム対ミャンマーの高校生チームのサッカーの試合をしました。相手は赤のユニフォームを揃え、若さと迫力がありました。小学生や一般の方々が観戦に来てくれました。近くの村人のほとんどが、観戦に来ているというくらいに映り、まさしく国際親善試合の様相です。我がチームは、女子のメンバーも出場し全員の力を結集してボールを追いかけてました。ミャンマーチームがシュートをたくさん放ち、2対3の惜敗でしたが、観衆の温かい声援を受け、緊張感と充実感を味わいました。さらに、交流会の後で村の少年に持参したバレーボールと空気入れを贈呈しました。品物を渡ししながら、バレーボールのフォームを伝えつつ、頑張るように話しました。長年の念願が、少し叶った瞬間でした。今後とも、バレーボールの底辺拡大を目指したいです。

三つ目は、ヤンゴンの僧院の方々との交流です。お互いの芸能を披露し合い、特にビルマの豎琴の音色を聞くと、映画を連想し涙があふれそうになりました。僧院で日本語を学習している大学生と英語で話し、話が通じると思わずほほ笑んだりしたことが思い出に残りました。

番外編としては、20代男性の植林ツアー参加者と私とでホテルのプールで、人間ピラミッドを作るチャレンジをしたことです。ウォーターボーイズを思い出し、20代のボーイズと心をつなぐことができました。ミャンマーの地を去る時には、ミャンマーの人々の心の温かさとシュエダゴオン・パヤーの金色の輝きが私の心に刻まれました。

植林ツアー体験記

古澤智子

国連開発計画アジア地域事務所

ミャンマーのイメージは、来る以前は、他国との接触を断ち、孤立した国、でした。ビザを取得するため、バンコクのミャンマー大使館に行った時には、多くの観光ビザ申請者が居て驚きました。ミャンマー到着後は、他の参加者より数時間早く着いたため、Aung Din さんにヤンゴン案内してもらいました。

英語表示が至る所で見かけられ、欧米製品の看板も多く見かけました。小学校から英語を教えているようで、たいいてい人は英語を話せるとのことでした。ヤンゴンの街並は、イギリス植民地時代の面影を残し、建物はコロニアル風、幅広い並木道、緑に囲まれ、のんびりとした雰囲気でした。2,500 年前に建てられたシュエダゴンパゴダは、ミャンマー最大のパゴダで、世界中の仏教徒の聖地だそうです。数多くあるパゴダは皆、黄金に輝き、崇高で、まるで別世界に居るようでした。

2 日目は、ヤンゴンからバガンへ。バガンでは、Nature Lovers のスタッフが笑顔で迎えてくれました。また、彼らの流暢な日本語に驚きました。East Phar Saw 村で、植林作業の説明を受け、現場の見学、そして、植林作業へ。現地の村人たちは、3 度目なので、慣れているようで、彼らが率先して作業を進めていました。また、学校の先生たちもともに協力的で、植林はスムーズに進みました。

その後、去年植林した木々を観察に、別の現場へ。私が昨年植林をお願いした5本の木は、全てが1.5m ほどに伸びていました。夕方にはバガンのパゴダを見学に。360 度見渡す限り、木々とパゴダ一面で、他にはない、壮大な景色でした。また、そこで見た夕日はとても素晴らしく、忘れられません。バガンでは、ヨーロッパ人のツアー客も見かけましたが、観光業が発展しても、この神聖さを保ち続けてほしいと願います。

翌日は、ミャンマー森林省バガン地域担当の Aye Thiha さんに来て頂き、彼が担当した植林プロジェクトのブリーフィングを受けました。他国からの経済制裁のため、ドナーやメジャーな基金からの支援が受けられず、また Carbon credit 等の有望な資金源にもアクセスができないとの事でした。

ミャンマーが、いち早く民主化を取り戻し、政治的制約から解放され、より良い国へと発展し、この優しく、温かい人々が、恩恵を受けられるようになる事を願います。アジアで仕事をしていると感じる事なのですが、アジア人は、真面目で優秀なので、適切なインセンティブとトレーニングの機会が与えられれば、彼らは自分たちで充分国の発展を支えて行く事ができると思います。現地をよく知らない私ができるのは、ドナー等から資金を集め、彼らの活動を支援する事くらいだということを、痛感します。

この植林ツアーに参加し、いろいろなバックグラウンドの参加者の方々と交流ができたのも、勉強になりました。現在は、ミャンマーの隣のタイ、バンコクに住んでいますが、この植林ツアーがなければ、ミャンマーに来る事は考えていませんでした。この植林ツアーを通して、貴重な機会を頂けた事を感謝いたします。

最後に、このような活動、交流が、この MJET と Nature Lovers に留まらず、国を超え他にも広がり、相互理解、環境保全に繋がっていくことを願います。

10. 植林ツアーの課題

(藤村建夫)

(1) 樹種の選定と植林地図の作成

- 今年は、パートナーの Aung Din さんが事前に現地を訪問し、あらかじめ、村人と一緒に 1.5～2 m 間隔で穴を掘っていた。しかしながら、今年は雨がなかなか降らなかったために、農作業と重なり、穴掘り作業が遅れたため、植林の当日も穴掘り作業が続けられた。このため、植栽穴毎の樹種別植林プランは、現地到着日まで継続され、植林の際に現場で確認した。
- 今回は、図面班が設置され、事前に植栽穴毎に樹種の名前を記入していたが、実際の苗木と図面上の苗木が合致してないものが多々見受けられ、図面を訂正する作業が追加された。後から送られてきた図面をみると、樹種の配置には、一定の配慮が行われたことがわかる。

(2) 穴掘りと有機肥料の準備

- 村人が、穴掘り作業と平行して、有機肥料（牛糞と土と木の葉等を混ぜたもの）を作り、蓄えていたので、植林の際に各々の穴に有機肥料を搬入して小分けして投入したので、効率的であった。しかし、East Phar Saw 村では、有機肥料の集積所が現場から離れていたため、植林作業が遅延することがあった。村長の話では、人手がうまく段取りできなかったのが原因のようである。

(3) ラベルの作成

- 今回は、去年の経験をもとに、参加者があらかじめ、植林寄贈者の氏名と番号、日付を書いたラベルを事前に作成する時間をとったことが、よかったが、樹種とパートナーの名前をつけるのに、現場での時間を要した。ラベルの作成を、事前に進め、植林の際に、パートナー同士が、自分たちの名前を確認しながら、植林を円滑に進めることが出来るよう更に検討したい。このためには、日本からのドナーの名前と本数を 2 週間以上前に現地に送付する必要があるだろう。
- ラベルの番号は、植林寄贈者名ごとの通し番号とし、別途、植林予定図により、植林番号と植栽地が判別できるよう記録しておく。

(4) 植林実施の手順

- 実際の植林作業は、植林参加者（植林寄贈者を兼ねる）が村の植林参加者（僧院関係者等を含む）とパートナーになって(今回は村人の男女)行えるように、パートナーの確認に時間を費やした。参加者は、自分の木をパートナーと一緒に、その家族の家の庭に植林することができたので、感動が倍加された。この方式は、今後とも継続したい。

(5) 水の確保

- 植林後の水遣りは大切であるが、村における水のプライオリティーは、飲み水、家畜、作物の順になると思われ、植林用の水の確保は課題である。今年も、運よく直前に雨が降り、両村の池は 7 割方、満杯であった。また、ツアー参加者が帰国後、4 日間、猛烈な雨が降ったという。East Phar Saw 村の今年の植林地域は、池に比較的遠く、水遣りが大きな

負担になりそうであることから、小学校の壊れた井戸の修復の可能性を早急に調査することになった。

(6) メンテナンスとモニタリング

- N L Gは、メンテナンスとモニタリングは、各村の緑化委員会の中に設置する考えで、若いU Wunna Min をリクルートした。両村の責任者と協力して、6ヶ月毎の写真と樹高の測定を依頼することになるが、その仕事を十分監理する必要がある。これは、N L Gが責任を持って実施することになる。植林された苗木の数は、両村とも、約 2000 本に到達したので、モニタリングは相当に大変な作業となることが予想される。

(7) 協力する村とのパートナーシップの構築

- 今回の植林で、両村とも焼く 2,000 本の苗木を植林したことになるが、両村とも、これで植林できる村の共有地はほぼ限界に達したものと認識された。このため、来年度の植林は、これらの村は、最小限にして、新しい村を開拓する必要があることがわかった。
- 村人は、この植林活動に非常に協力的であることから、今後は、植林された木の活用と処分をどのように考えているのかなど、植林以外の協力をどのように進めていくべきかについて、長期的視点を考慮していく必要がある。
- 今後、太陽光発電装置の設置が一つの協力ポイントなり、更に一村一品運動の品目を早く決定する必要がある。農業公社に依頼しておいた、ネリカ米の試験栽培は、うまく発芽しなかったことが判明したので、早急に次の方法を検討すべきである。

1 1. 植林ツアー後記

(藤村建夫)

今回の植林ツアーは、第三回目の本格的植林ツアーであった。第三期生として、学生 9 名と正会員・社会人 13 名、計 22 名が参加した。昨年は 4 名の学生さんのみが参加したのに比して、今年は同志社大学の学生さん 5 人の参加が増え、一般社会人も倍増して、現地の村人達との交流がの深まったことを考えると、内容的には、更に一層充実したものとなった。

同時に二つの村での植林可能性は限界に到達したことが確実に認識された。つまり、両村の植林可能な共有地は、2,000 本で限界に達したということである。来年度に多少の余裕があったとしても、各 100~200 本程度であろう。よって、来年度は、新しい村を発掘する必要がある。すでに、一つの村が候補として上がっているので、来年 3 月の準備調査の時に、十分な打ち合わせが必要となる。

加えて、二つの村では、第二段階を実施に移さなければならない。幸い、福永さんが推進しておられる「(NP0) ソーラーエネルギー普及促進協会」の太陽光発電装置は、福永さんと U Aung Din のご尽力で、輸入許可が取得されたので、今年中に第 28 小学校の集会所と職員室に LED ライトが点灯できそうである。これを、二つの村に普及していくことが、第二段階として、相応しいと

考えられる。また、East Phar Saw 村では、植林したサイトへ池から運ぶ水の運搬がかなりの重労働と想定されることから、近くの小学校の構内に位置する井戸水を早急に修理することが望まれる。これは、U Aung Din がフォローアップすることで、了解されている。

来年度以降は、昨年度に検討した**同時並行戦略**を採用し、植林は、新しい村を一つ探して実施するとともに、現在の二つの村では、フォローアップと太陽光発電装置の増設を検討したい。具体的には次のような活動となる。

- **Than Sin Kyae 村**

- 太陽光発電装置の増設

- 一村一品運動の品目の調査と確認

- (特にネリカ米の作付け試験を 3～5 月に実施する)

- **East Phar Saw 村**

- 小学校の構内の井戸水の修復

- 太陽光発電装置の小学校への設置

- **新しい村**

- 植林の実施（植林の苗木数を 800 本程度に抑える）

このためには、MJET の財政基盤を強化する必要がある。また、植林の寄贈者として、「2 人の森」、「家族の森」、「企業の森」の募金を強化して、安定した植林事業を拡大することが重要である。今年は、これらの記念の森の寄贈者が見つかり、実績ができたので、これらをパンフレットに載せて、大いに PR する必要がある。「家族の森」は、外国人にも人気があるので、英語版のウェブサイト을できるだけ早く立ち上げることとしたい。

付録 1. 植林ツアー参加者

MJET 植林ツアー参加者

学年	氏名	所属大学、学科
学部3年	伊藤 優	同志社大学政策学部
学部3年	小石和平	同志社大学政策学部
学部3年	植下雅也	同志社大学政策学部
修士2年	魚谷弥生	同志社大学大学院総合政策科学研究科
修士2年	松尾雄一	同志社大学大学院総合政策科学研究科
学部2年	古城真理子	東京外国語大学、ビルマ語学科
学部1年	古橋櫻子	東京外国語大学、ビルマ語学科
学部4年	高橋力也	宮城大学食、産業学部 フードビジネス学科
修士1年	山本林彌	東京大学、新領域創成科学、環境学、国際協力専攻
一般	岡本由美子	同志社大学政策学部、教授
一般	岡田 篤	国際協力機構、国際協力人材部
一般	村上俊一	国際協力機構、調達部
一般	木村明広	国際協力機構、農村開発協力部
一般	川瀬翔平	財務省理財局
一般	加賀美英子	国立国際医療センター
一般	下野直子	ウエルシア関東
一般	鈴木慶一	日立市立日立養護学校
一般	古澤智子	国連開発計画（UNDP）アジア地域事務所
会長	藤村建夫	ミャンマー日本・エコツーリズム
理事	神田道男	ミャンマー日本・エコツーリズム
MJET 会員	福永喜朋	(NPO) ソーラーエネルギー普及促進協会会長
MJET 会員	野口 彩	(株)エコアビーム

Myanmar 側パートナー参加者

会長	U Aung Din	The Nature Lovers Group
職員	U Wunna Min	The Nature Lovers Group
幹事	U Lin Naing	Myanmar Japan Buddhist Youth Association
学生	Ko Htet Min Thu	Myanmar Japan Buddhist Youth Association
学生	Ko kaung Htet Paing	Myanmar Japan Buddhist Youth Association

付録 2 植林ツアー日程表

Date	Day	Leave	Arrive	AM	PM	Overnight stay
8/28	Sat	Narita/ Kansai Bangkok	Bangkok/ Hanoi Yangon	11:00 byTG641, to arrive at 14:30/ 11:45 by TG623 at Kansai to arrive at 15:35 (VN955)	17:50 by TG305 to arrive at 18:45	Yangon Asia Plaza Hotel
29	Sun	Yangon	Bagan	06:15 by W9-009 to arrive at 07:30 Visiting Than Sin Kyae village and planting trees	14:00 Visiting East Phar Saw village Consultation and consultation with villagers on how to do planting trees	Bagan Thazin Garden Hotel
30	Mon			08:00 Tree-planting in the East Phar Saw Village	14:00 Tree-planting in the East Phar Saw Village 18:00 Sunset	Bagan Thazin Garden Hotel
31	Tue			08:00 Tree-planting in the East Phar Saw village	14:00 Sightseeing in the Bagan area 18:00 River cruise	Bagan Thazin Garden Hotel
9/01	Wed			08:00 Tree planting in the East Phar Saw village 11:00 Outing to the Mt. Popa area	Outing to the Mt. Popa area Exchange programme with Than Sin Kyae villagers	Bagan Thazin Garden Hotel
02	Thu			05:00 Seeing the sunrise Sightseeing in the Bagan area (Temples)	14:00 Sightseeing in the Bagan area (Tanaka museum, Sakura Hotel, U Ba Nyun lacquer ware shop)) Exchange programme with East Phar Saw villagers	Bagan Thazin Garden Hotel
03	Fri	Bagan	Yangon	07:50 by W9-009 to arrive at 10:30 Sightseeing the white elephants and mulberry Buddha	Visiting VFRDC in Legu Sightseeing Shwedagon Pagoda in the evening	Yangon Asia Plaza Hotel
04	Sat	Yangon	Hanoi	09:00 Exchange programme with MJB YA	Free 19:50 by TG306 Arrive at 21:30(or VN700) 23:30 by TG622 for Kansai 23:50 by TG642 for Narita	(To stay in flight)
05	Sun	Hanoi	Narita	00:05 by VN954 to arrive at 06:50 Arrive at Kansai at 07:00 Arrive at Narita at 08:10		

付録 3 二つの村の概要

1. Than Sin Kyae 村の概要

Than Sin Kyae (タンシンチェ) 村は、マンダレー管区に位置し、村の開始は、11 世紀のバガン王朝にさかのぼる。伝説によれば、Than Sin Kyae 村の由来は次のようである。

有名な王の 1 人である Alaung Sithu 王は、その王国を視察旅行した後の集まりにおいて、「彼の曾祖父までを含めて、自分ほどの力を持った王がいたであろうか？」と皆に尋ねた。彼らをあたかも侮辱するような、誇り高い言葉を口にするために、ついに彼の両目は見えなくなってしまった。そこで、占い師は、王宮において、「王様の視力は、王様が侮辱された曾祖父様たちの像を建てて弁護なさった時にのみ、回復するでありましょう」と予言した。Alaung Sithu 王は、「それならば、彼らの像を建てるために相応しい、清らかな良い土地を見つけよ」、と家来に命じた。すると、Byatta という男が王様に奉る花束を清める清らかな池が見つかった。そこは偉大な祖父達の像を造るに相応しい浄土を得るのに格好の土地であった。祖父達の立派な像が造られ、その土地は伝統的な作法に従って立派に設えられた。Alaung Sithu 王は、彼の祖先の人々に祈りを捧げ、十分な尊敬の念を払った後に、王宮に戻られた。その後、彼の視力は奇跡的に回復したのであった。このような信じがたい出来事が起こったので、Alaung Sithu 王は、祖先を敬った土地と視力を回復した土地、すなわち、Kadaw Palin (祈りの場所) および Shinpin Pwintlin (視力回復の場所) にそれぞれ寺院を建立した。

Kadaw Palin は、2007 年に中田英俊氏がミャンマーの新年に咲く Padauk の木を植樹した寺院であり、バガンでもっとも有名な寺院の一つとなっている。毎年 4 月にその木は美しい花を咲かせている。祖先の像を造るに相応しい浄土が得られた Shinpin Pwintlin には、寺院を守る村が作られた。それは Kon Sin Kyae と名づけられた。やがてその名前は Kwan Sin Kyae へと少しずつ変化し、今では Than Sin Kyae と呼ばれるようになり、王様のボートを漕ぐ村 (力のある人々) として知られていた。タンは、クリーンの意味で、シンチェは丘の意味。つまり、「清らかな丘」の村と詠われていた。

現在の村は、200 世帯約 1000 人が居住し、南にあるため池と隣接するパゴダと僧院、格子状の街路を基礎に、集落を形成している。小学校と新しいパゴダを村の入り口 (北側) に設置している。電気はない。水は、政府によりイラワジ河の川水を小学校の脇の貯水タンクまで圧送してもらっている。村人は人力による三輪車と二頭立ての牛車により、その 2 つの貯水タンク (1 つは MJET の寄贈) へ水くみにやってくる。観察では、午後 4 時から 5 時の間に、貯水タンクに水汲みにやってくる人達が多いようだ。人力三輪車は女性 2 名が運び、牛車は、男が多く、女性の場合もあるが、1 名である。小学校は、1 年生から 5 年生まで、約 100 人の生徒が在籍している。村には、集会所がなく、小学校の教室を使用している。

2. East Phar Saw 村の概要

East Phar Saw (イーストパッソー) 村は、同じマンダレー管区にあり、Than Sin Kyae 村の南南西約 2 km に位置している。村の伝説は以下のように伝えられている。

13 世紀、バガン王朝の時代に、ポパ山の近くの Seik Htein Phyu 村に一人の農民が住んでいた。彼は、畑を耕しに一人娘の Ma Saw をいつも連れて行き、木陰に休ませて、働いていた。ある時、彼女が休んでいると、一匹の毒を持たない大きなへびが、彼女に日陰をつくっていた。彼女が年頃になった時、Ponnyet という木を植えたところ、3 つの違った花が咲いたので、不思議に思った農民は、占い師に「どういう意味だろうか？」と尋ねた。すると、占い師は、「彼女は 3 代の王の妃になるだろう」と答えた。後に彼女は Uzana 王の妃となり (1250~1255)、その王が亡くなると、次の Narathihapate 王は、彼女の賢さを気に入って妃にした (1255~1287)。更に、次の王となった Kyaw Swa 王も彼女の賢さを気に入って妃にした (1287~1300)。その次の Sawnit 王も妃として迎えることを希望したが、その時、彼女はすでに 70 歳になっていたのも、彼女を祖母として世話をすることにした。王は、彼女の栄誉を称え、仏塔を建てその仏塔の世話をするための村を近くに作った。仏塔は、最初 4 メートルで建設 (タンティア・ソア) されたが、後に、10 メートルに再建され、さらに 20 メートルに再建された。その村は、Phar Saw (Saw お婆さん) と呼ばれるようになり、今日に至っている。

現在の村は、100 世帯、約 500 人が居住している。村の南にある溜池とパゴダがあり、北側に集落がある。僧院は集落の西側にある。入口に近いところに、村の集会場があり、隣接して、診療所がある。村の中では、栽培した綿から糸を紡ぎ、織物を作っている民家や、竹をマンダレーから購入し、漆器の下地を竹で作っている民家がある。いずれも、バガンの観光客を対象にしたものと思われる。小学校は 1 年生から 4 年生まで、28 人の生徒が在籍している。小学校の裏手 (南側) に、UNICEF の援助で深井戸が掘られ、乾期には、この場所が取水場になる。雨期は、雨水を貯めて飲用にすると、主として女性が、溜池から天秤に 20 リットル缶、2 個をさげて水を運んで水遣りをする。村の統率がよくとれており、集会場が拠点となっている。ここに、中国製の小型のジーゼル発電機があり、必要に応じ一部に電気を送ることができる。この意味では、タンシンチェ村より進んでいる。